御影山手遺跡第2次　発掘調査概報

平成18年3月31日　神戸市教育委員会

0　400　800m

序

六甲山系東半の南麓は南に面した小高い地形が続いており、神戸の都市化が進み始めた当初から閑静な住宅地として開けてきました。今回発掘調査を実施した東灘区御影山手も早くに住宅地となった場所でした。調査によって古墳時代後期の古墳群と、奈良時代の掘立柱建物群が見つかりましたが、これまでに遺跡の存在は知られていたものの、これほどまでの成果が得られるとは考えられていませんでした。およそ1,200年前の奈良時代の昔からこの地が開けていたということになります。

近年は市内のマンション建築件数も増加しており、少しずつではありますが、民間の経済状況も改善されつつあるように思えます。震災後10年以上を経過し、神戸空港も新たに開港した今日、今後もさらに神戸の街が発展していくことを切に望んでおります。

筆末になりましたが、発掘調査・報告書刊行に際してご助力頂きました関係諸機関・関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成18年３月31日

神戸市教育委員会
教育長　小　川　雄　三

例　言

1．本書は平成17年度に、現行住居表示では兵庫県神戸市東灘区御影山手２丁目11－32で発掘調査を実施した、御影山手遺跡第２次調査の報告書である。
2．発掘調査は集合住宅の新築に伴うもので、神戸市教育委員会が三菱地所株式会社からの依頼を受け、平成17年５月30日～９月28日の期間で現地調査を実施した。また遺物整理も同年度に神戸市埋蔵文化財センターで実施した。調査組織は本文を参照されたい。
3．現地調査での遺構等の写真は関野　豊が撮影し、ラジコンヘリからの空中写真は株式会社ＧＥＯソリューションズが撮影した。遺物の写真は西大寺フォト　杉本和樹氏が撮影した。
4．使用した各種の地形図は清水靖夫編・柏書房刊『明治前期・昭和前期　神戸都市地図』に収録されている１:20,000假製地形図、国土交通省国土地理院発行の１:25,000地形図「西宮」「神戸首部」、神戸市発行の１:2,500地形図「六甲口」「大石」「住吉」「石屋川」である。
5．使用した方位・座標は、国土調査法(昭和26年６月１日法律第180号)の施行令(昭和27年３月31日政令第59号)第二条及び別表第一によって定められた、平面直角座標系中国東Ⅴである。また標高は東京湾中等潮位(Ｔ.Ｐ.)である。
6．本書の執筆と編集は関野　豊が行った。
7．出土遺物、図面・写真等の記録資料は神戸市埋蔵文化財センターで保管している。各方面での資料の幅広い活用を希望するとともに、公開に努めたい。

本文目次

序……表紙裏
例言……表紙裏
目次……1
第Ⅰ章　はじめに……3
　第１節　調査に至る経緯と経過……3
　第２節　調査組織……5
　第３節　調査日誌(抄)……5
第Ⅱ章　調査成果……6
　第１節　基本層序……6
　第２節　検出遺構……9
　第３節　出土遺物……17
第Ⅲ章　まとめ……22
報告書抄録……裏表紙裏

図版目次

第１図　御影山手遺跡周辺微地形復元図(１:8,000)……表紙・裏表紙
第２図　御影山手遺跡位置図(１:25,000)……3
第３図　調査地点位置図(１:2,500)……4
第４図　周辺の旧地形(１:10,000)……4
第５図　調査地点周辺の地籍図(前田慶三編『阪神沿道地籍圖』大正９年７月22日に加筆)……6
第６図　東壁南半土層図(１:50)……7
第７図　遺構面平面図(１:250)……8
第８図　２号墳周濠(溝ＳＤ01)遺物出土状況平面図(１:20)……9
第９図　掘立柱建物群平面図(１:160)……10
第10図　掘立柱建物ＳＢ01平面図(１:50)……11
第11図　掘立柱建物ＳＢ02平面図(１:50)……12
第12図　掘立柱建物ＳＢ03平面図(１:50)……12
第13図　掘立柱建物ＳＢ04平面図(１:50)……13
第14図　掘立柱建物ＳＢ05・06平面図(１:50)……14
第15図　１号墳旧表土下遺構平面図(１:100)……16
第16図　３号墳旧表土下遺構平面図(１:100)……16
第17図　主な遺構の出土遺物(１:４・１:２)……17
第18図　落ち込みＳＸ03出土埴輪(１:４)……18
第19図　遺物包含層等出土埴輪(１:４)……19
第20図　遺物包含層等出土須恵器・土師器(１:４)……20
第21図　遺物包含層等出土弥生土器(１:４)……21

写真図版目次

図版１　１．調査区全景(南西から)　２．調査区全景(俯瞰)……23
図版２　１．古墳群(東から)　２．古墳群(１・３号墳)(南東から)……24
図版３　１．古墳群と掘立柱建物群(南東から)　２．古墳群と掘立柱建物群(南西から)……25
図版４　１．掘立柱建物群(南から)　２．掘立柱建物群(北西から)……26
図版５　１．１号墳(南東から)　２．１号墳周濠(南東から)……27
図版６　１．２号墳(南から)　２．２号墳周濠(溝ＳＤ01)滑石製紡錘車出土状況(東から)……28
図版７　１．２号墳周濠(溝ＳＤ01)鉄製鎌出土状況(南から)　２．３号墳(南から)……29
図版８　１．掘立柱建物ＳＢ01(北西から)　２．掘立柱建物ＳＢ02(南東から)……30
図版９　１．掘立柱建物ＳＢ03(南東から)　２．掘立柱建物ＳＢ04(南東から)……31
図版10　１．掘立柱建物ＳＢ05・06(南から)　２．溝ＳＤ02(南から)……32
図版11　１．溝ＳＤ03(東から)　２．土坑ＳＫ01・落ち込みＳＸ02(南西から)……33
図版12　１．落ち込みＳＸ01(南から)　２．落ち込みＳＸ03(南東から)……34
図版13　１．落ち込みＳＸ04(南西から)　２．ＳＫ02・03(南東から)……35
図版14　１．１号墳旧表土下遺構(南東から)　２．３号墳旧表土下遺構(南西から)……36
図版15　１．２号墳周濠(溝ＳＤ01)・溝ＳＤ02出土遺物……37
図版16　１．３号墳周濠(溝ＳＤ04)出土遺物　２．落ち込みＳＸ04出土遺物　３．ピット出土遺物
　　４．落ち込みＳＸ03出土遺物……38
図版17　１．円筒埴輪　２．朝顔形円筒埴輪　３．形象埴輪……39
図版18　１．奈良時代～平安時代の須恵器・土師器　２．弥生土器……40

第Ⅰ章　はじめに

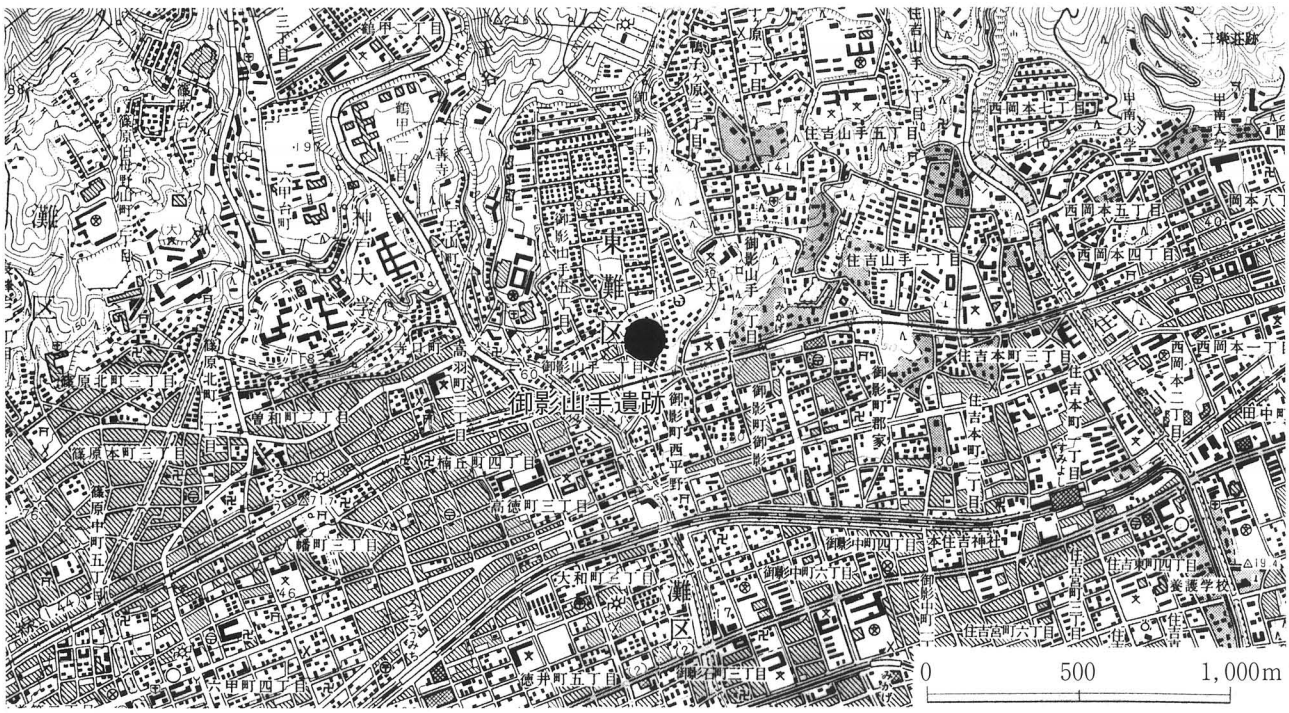
第１節　調査に至る経緯と経過

御影山手遺跡は六甲山系東半南麓の南西斜面の東灘区と灘区との境を流れる石屋川の東側にある遺跡で、石屋川の支流の新田川と宮谷川の２つの小さい川にはさまれた南西斜面に立地する遺跡である。周辺一帯は完全に住宅地化しているが、陸軍陸地測量部作成の假製図によると遺跡のすぐ北隣まで六甲山から派生する尾根が迫っており、その直下であったことが判明する。調査開始前の標高は56ｍで、敷地南隣の住宅の屋根や遠方の共同住宅などで少し見えにくいものの、現在でも海岸線までの眺望が開けている。

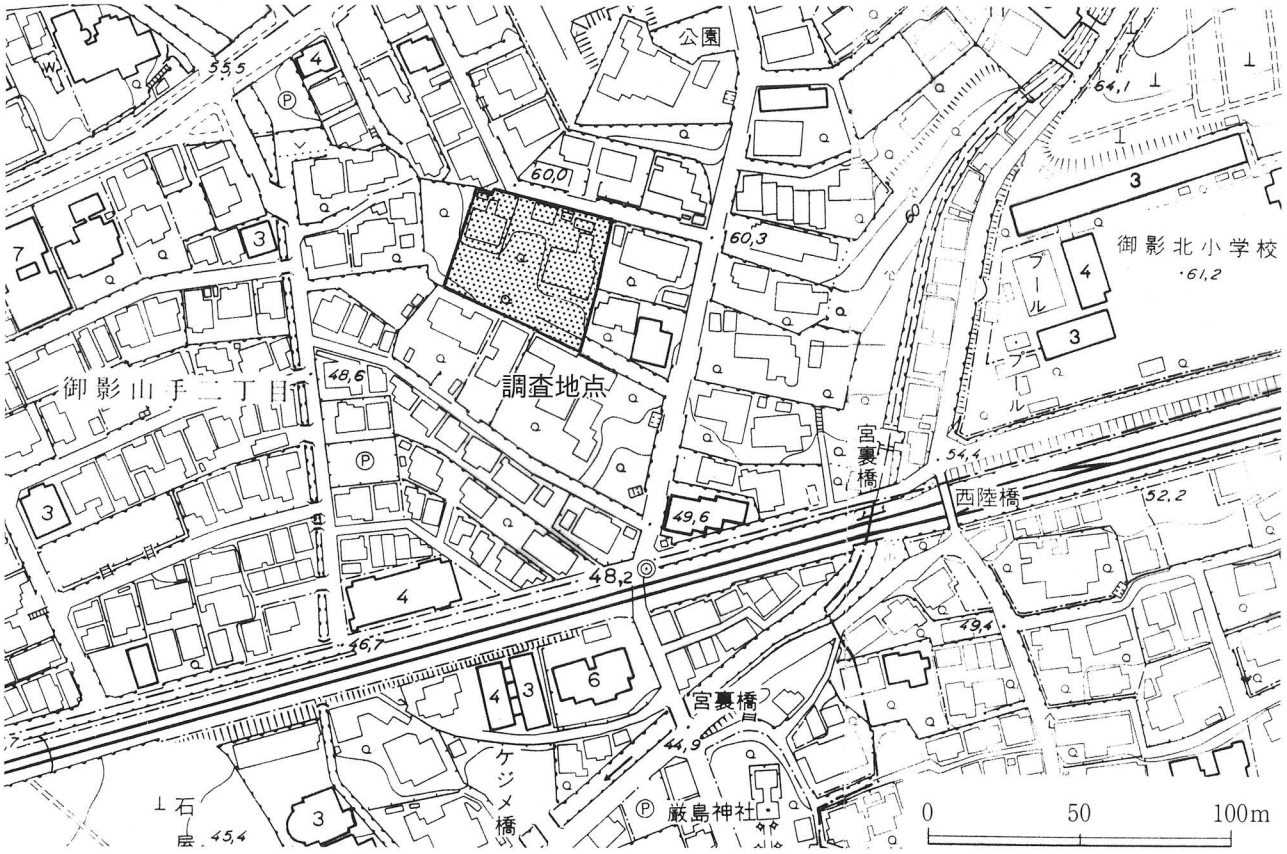
遺跡は平成３年２月に今回の調査地点の西方で第１次調査が実施されている。それ以来発掘調査を実施する機会は得られなかったため、今回が第２次調査となる。第１次調査では江戸時代の長方形の土坑が２基、平安時代末の掘立柱建物が１棟、鎌倉時代の谷地形が検出されている。それらの他に弥生時代後期の土器も出土しており、近くに弥生時代後期の遺構が存在する可能性も考えられていたが、遺跡の明確な姿はあまり判っていなかった。

平成16年度に当該地で宅地造成の計画がだされたが、敷地が広いために遺跡の分布状況や遺存状況を確認することを目的として、同年５月25日と６月28日の計２回にわたって試掘調査を実施した。２回合計８本の試掘トレンチの結果、敷地のほぼ全面に埋蔵文化財が存在することが明らかとなった。その後計画は共同住宅建設に変更されることになったが、試掘調査の結果を受け、今年度になって共同住宅の基礎部分の大半、約1,200㎡を発掘調査する運びとなった。

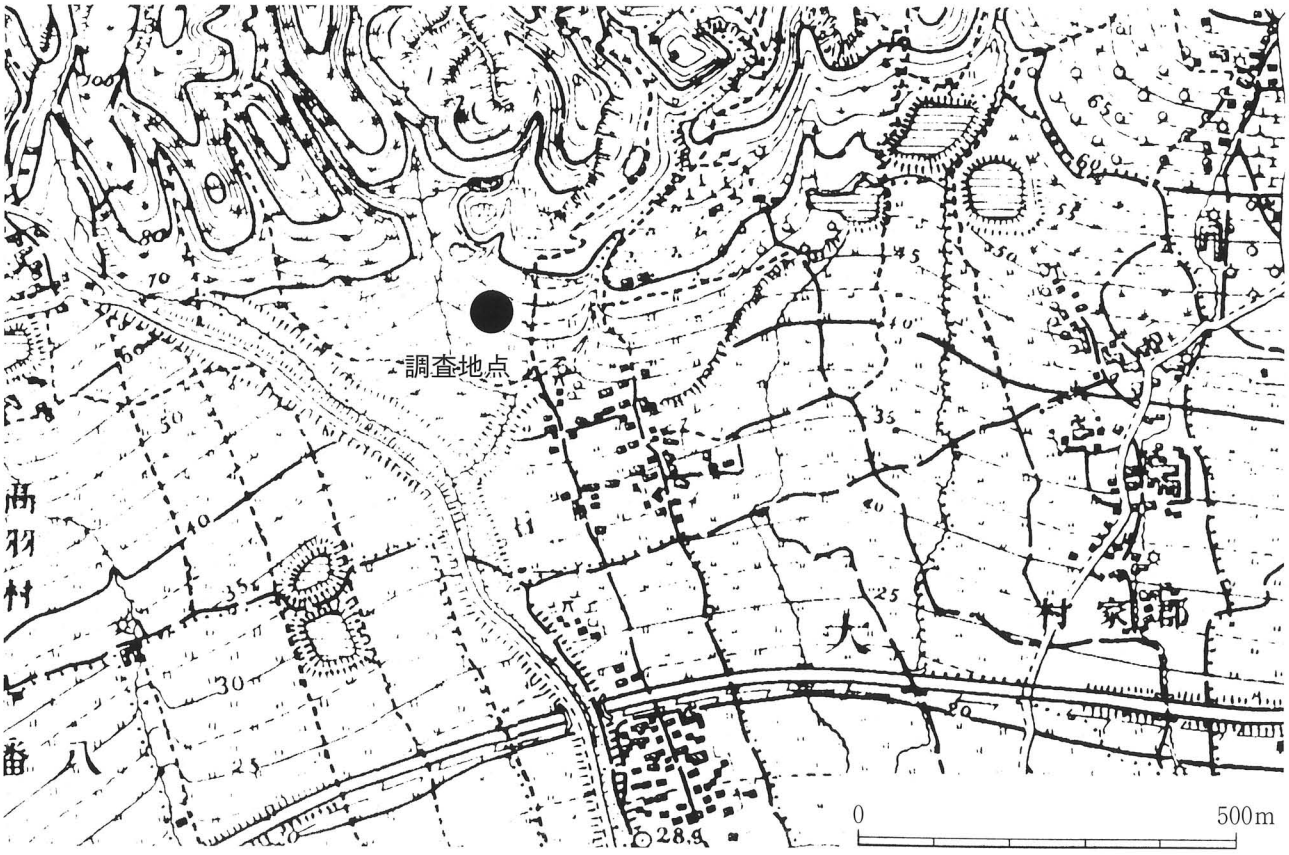
調査の結果、調査開始前当初の予想以上の成果が得られた。したがって調査期間半ばの７月15日には地元の御影北小学校６年生５クラスが対象の発掘調査見学会を実施した他、終盤の９月３日には一般市民対象の現地説明会を実施し、150名以上が来場した。



第２図　御影山手遺跡位置図（１:25,000）



第３図　調査地点位置図（１:2,500）



第４図　周辺の旧地形（１:10,000）

第２節　調査組織

発掘調査は神戸市文化財保護審議会の指導の下、以下の組織で実施された。

神戸市文化財保護審議会委員　史跡考古担当

檀上　重光(前神戸女子短期大学教授)・工楽　善通(大阪府立狭山池博物館館長)・和田　晴吾(立命館大学文学部教授)

神戸市教育委員会事務局

教　　育　　長　小川　雄三
社会教育部長　高橋　英比古
教育委員会参事　桑原　泰豊(文化財課長事務取扱)
社会教育部主幹　渡辺　伸行(埋蔵文化財指導係長事務取扱)
埋蔵文化財調査係長　丹治　康明
文化財課主査　安田　滋
事務担当学芸員　山本　雅和・佐伯　二郎・橋詰　清孝・井尻　格(埋蔵文化財指導係)
同　　上　東　喜代秀(埋蔵文化財調査係)
調査担当学芸員　関野　豊(埋蔵文化財調査係)
遺物整理担当学芸員　内藤　俊哉(埋蔵文化財調査係)

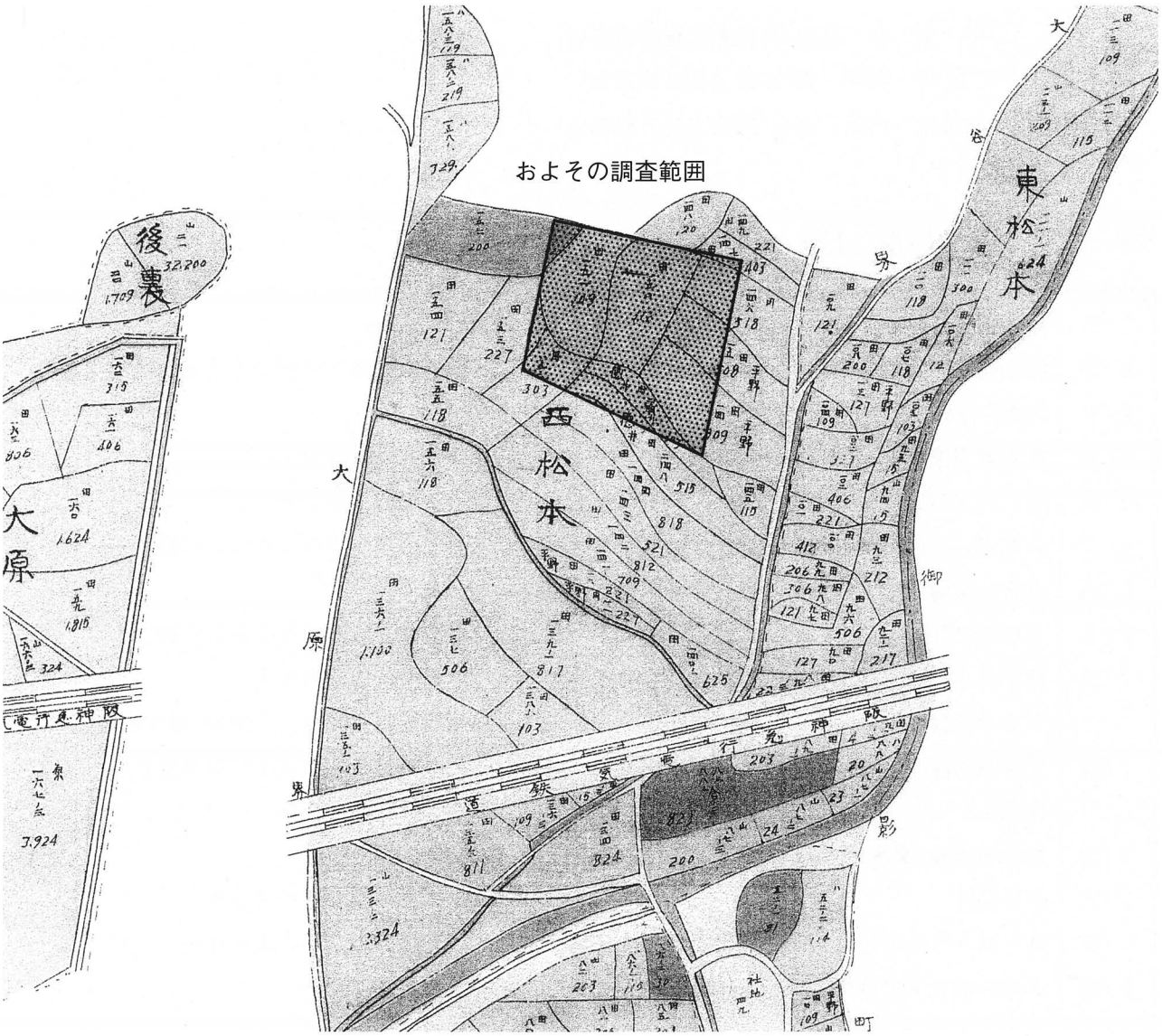
第３節　調査日誌(抄)

5/27	調査機材等搬入		教員１名。
5/30	調査開始。重機掘削開始、遺構見え始める。	8/4	掘立柱建物３棟分追加確認。３号墳周濠検出。
6/6	御影中学校トライやるウィーク。(～6/10)		
6/9	２号墳周濠(溝ＳＤ01)検出。	8/8	３号墳周濠掘削開始。
6/24	掘立柱建物３棟分確認。	8/17	空中写真測量準備開始。
6/27	基準点・水準測量実施。	8/23	降雨のため空中写真測量延期。
6/28	遺物包含層中より円筒埴輪片を確認。	8/25	台風接近
7/6	１号墳周濠検出。(調査当初は谷地形と認識。)	8/30	降雨のため空中写真測量延期。
7/15	御影北小学校６年生見学会、教職員含め５クラス約180名。	8/31	新聞各紙に資料提供。
		9/3	現地説明会開催、150名を越す来場者。
7/21	２号墳周濠(溝ＳＤ01)から石製紡錘車２個体出土。	9/6	台風接近のため空中写真測量延期。
		9/12	全景等の撮影実施。(～9/14、空中写真測量は9/13。)
7/22	２号墳周濠(溝ＳＤ01)から鉄製品出土。		
7/26	台風接近。	9/20	１号墳旧表土下の遺構検出。
7/27	落ち込みＳＸ01掘削開始、円筒埴輪出土。	9/26	３号墳旧表土下の遺構検出。
7/28	１号墳墳丘上で落ち込みＳＸ03検出。	9/28	調査終了。
8/1	六甲アイランド高校体験発掘、２年生３名、	9/30	調査機材等・出土遺物搬出。

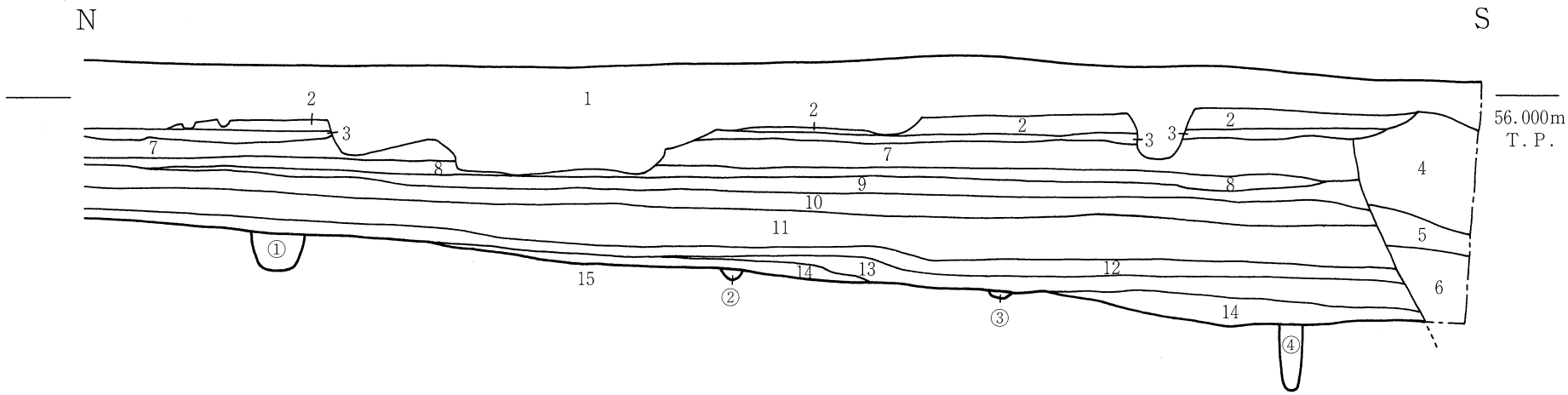
第Ⅱ章　調査成果

第１節　基本層序

調査地点は六甲山系南麓の斜面地に立地しているが、調査開始前の現状は概ね平坦ではあった。しかし調査の結果宅地化直前の耕作土には東壁だけで５段分の段差が確認され、そのさらに下から地形に沿った斜面の状態で遺構面を検出した。したがって実際の層序では耕作土直下が遺構面である部分や、耕作土の下に何層も旧耕作土や遺物包含層が遺存している部分などがあり、遺構面までの深さは全く一定していなかった。また調査区の北西部分は既存の建物も基礎による損壊が極めて著しく、表土直下が直ちに地山であるか、あるいは撹乱であり、さらにまた調査区の南辺は耕作地の段差で地山が大きく削られ、遺構はほとんど残っていない状況であった。このため調査区内全体を規定する基本層序は設定し難いが、ここでは東壁の土層図を参考として添付しておきたい。層序は上から順に現代の盛土、宅地化直前の耕作土が２層、旧耕作土が０～４層、遺物包含層が０～４層、地山と続く。遺構面は地山の上面である。



第５図　調査地点周辺の地籍図（前田慶三編『阪神沿道地籍圖』大正９年７月22日に加筆）

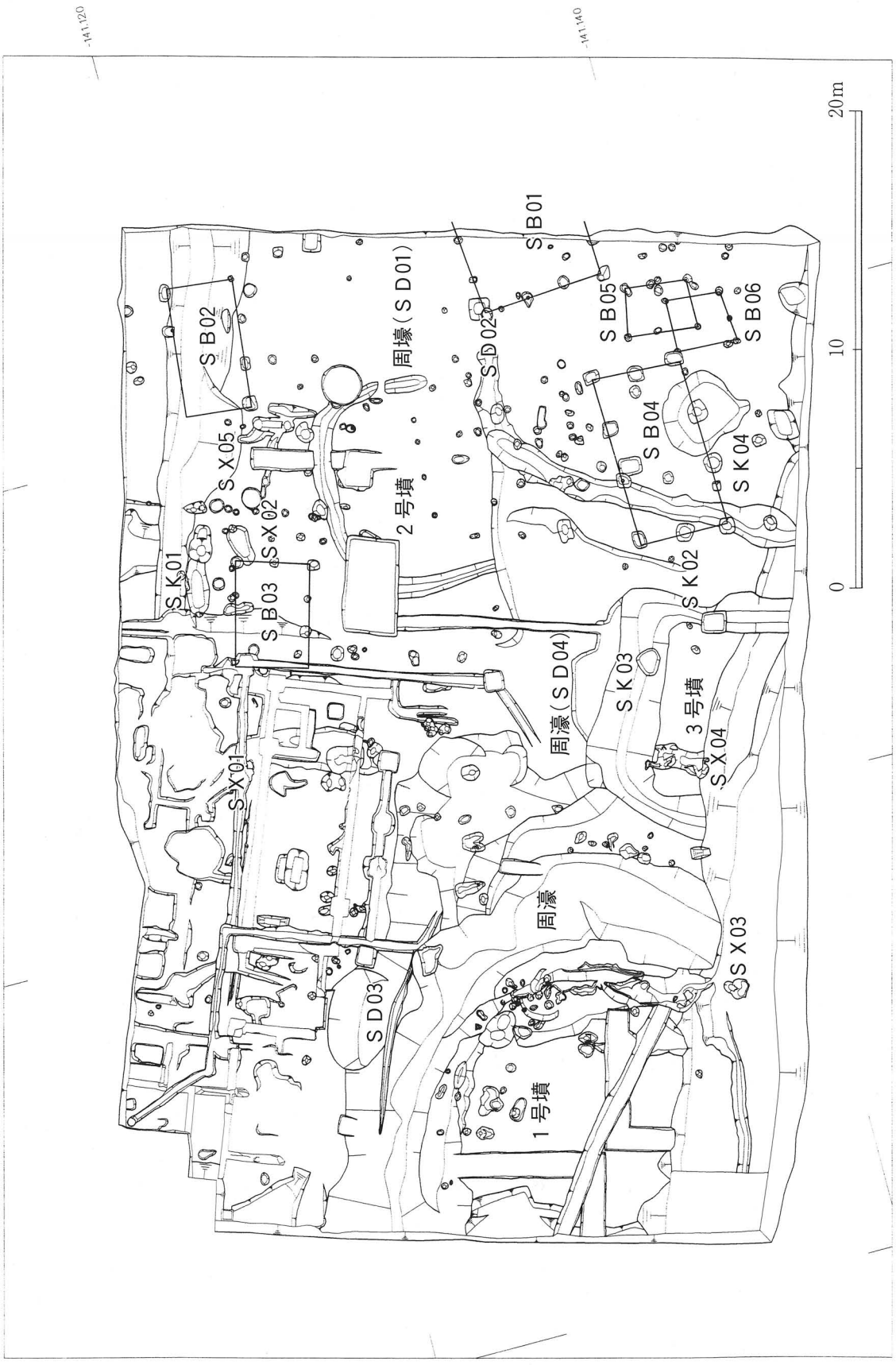


1	現代盛土・攪乱		11	遺物包含層	茶灰色砂混じり土～粘質土
2	宅地化直前耕作土	灰色粘質土	12	遺物包含層	褐茶灰色砂混じり土～粘質土
3	宅地化直前耕作土	淡褐灰色粘質土	13	遺物包含層	茶褐色粘質土
4	耕作地段差形成土	淡灰色粘質土	14	遺物包含層	暗灰茶色粘質土
5	耕作地段差形成土	褐灰色粘質土	15	地山	淡黄褐色粘質土他
6	耕作地段差形成土	淡黄褐色シルト混じり淡灰色粘質土	①	掘立柱建物ＳＢ01柱穴	淡茶灰色砂混じりシルト
7	旧耕作土	淡黄褐灰色粘質土	②	ピット	淡灰褐色砂混じりシルト
8	旧耕作土	淡灰褐色砂混じりシルト	③	ピット	褐灰色粘質土
9	旧耕作土	淡褐灰色粘質土	④	ピット	淡灰褐色粘質土
10	旧耕作土	淡黄褐色砂混じりシルト			

←遺構面

0　2　4 m

第6図　東壁南半土層図(1:50)



第７図　遺構面平面図（１:250）

第２節　検出遺構

検出した遺構は古墳３基およびその周濠、掘立柱建物６棟、溝４条、土坑１基、落ち込み５基の他、ピットが147基である。１号墳周濠は掘削開始段階では自然の谷地形と認識していたため遺構番号は付けられなかったが、ここでもそれを踏襲して番号は付けていない。規模が以下それぞれの遺構毎に記述していく。

１号墳　調査区の西半で検出した古墳である。古墳の西半は調査区外に続いており、また南側は江戸時代頃の水田の段差で大きく破壊されているが、復元すると直径約18mの円墳になるようである。墳丘上部はすっかり削られ、古墳築造時の旧表土と考えられる土がわずかに残っているだけであった。横穴式石室の痕跡は全く確認できなかったため、埋葬主体は古墳の上から掘り込まれていたと考えられるが、墳丘と共に削平されて全く残っていなかった。墳丘上からピット状の小穴がいくつか検出され、中にはある間隔で並んでいる様にも思えるものもあったが、墳丘の損傷と削平が著しいため確実に埴輪の樹立痕であるとは判断できなかった。

周濠　周濠は南へ傾斜しているが、概ね幅約３m、深さ約50cmで、底面の形状は平らではなく丸くなっている。また周濠のさらに外側には古墳の東側では約４m、北東側では幅約６mの自然地形を削り込んだ部分が確認された。したがって斜面地を大きく四角形に造成した中心に１号墳を築造したようにも見えるが、この地形が古墳を築造した当時のままの姿かどうかは不明である。埋土には局所的偏在しているものがあるが、上から順に暗灰色粘質土、褐灰色炭化物混じり土、淡褐灰色砂、暗茶灰色粘質土、暗灰色土と続く。また周濠埋土の暗灰色粘質土の上には遺物包含層が覆っているが、その時点では周濠やその外側の地形を削り込んだ部分はまだ窪んでいた様で、遺物包含層が窪みを埋めるように厚く堆積し、調査区の南半前面を被覆している。周濠およびその外側からは多くの埴輪が出土した。大部分は円筒埴輪の破片であるが、ごく少量は形象埴輪の破片の可能性があるものも含んでいた。円筒埴輪の形や作り方から見て古墳時代後期の埴輪と考えられ、中には須恵質のものも少量含んでいた。しかしこれらの埴輪はすべて小破片になっており、しかも奈良時代の土器と一緒に出土している。したがって１号墳は奈良時代頃のある時に上部が大きく損壊され、その後で周濠部分に奈良時代の土器と一緒に埴輪が埋まっていったと考えられる。

２号墳　調査区の東半で検出した古墳である。盛土および埋葬主体は完全に削平されて消滅してしまっており、北側と東西両側の周濠（溝ＳＤ01）しか残っていなかった。本来存在しなかった可能性が高いが、南側の溝は検出されなかった。東西約８m、南北約６mの長方墳に復元できる。古墳の主軸はほぼ南北方向を向いている。

第８図　２号墳周濠（溝ＳＤ01）遺物出土状況平面図（１:20）

周濠（溝ＳＤ01）　周濠は

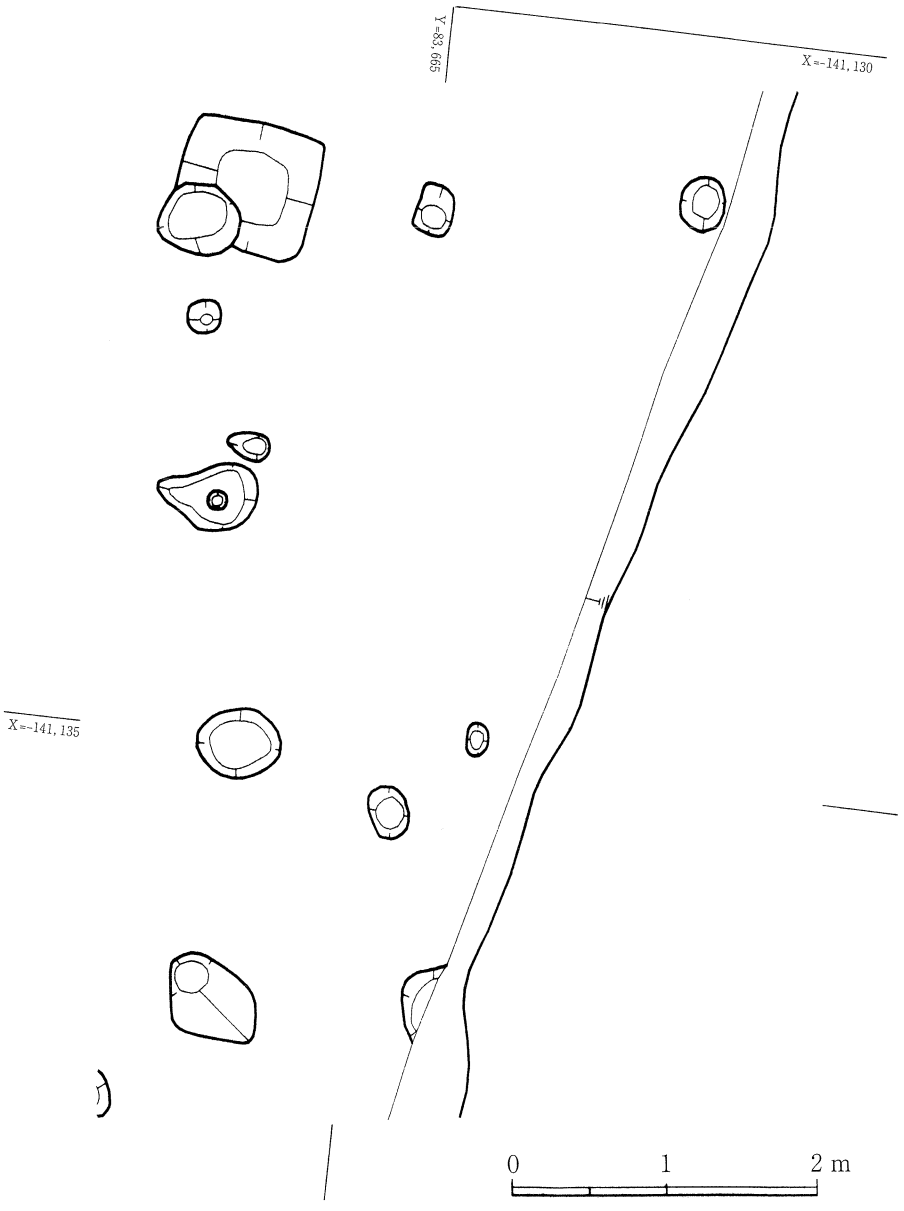
第９図　掘立柱建物群平面図（１:160）

南へ傾斜して狭く浅くなっており、幅50～90cm、北側の最も深い部分は深さ約30cmである。埋土は暗茶灰色粘質土で、北側の溝から古墳時代後期の土師器・須恵器の他、滑石製紡錘車が２点、鉄製鎌が１点出土した。これらは溝の中程の深さから出土したため、墳丘の上部が削られた時、埋葬主体から転落したものと考えられるが、その深さでの埋土の差異は確認できなかった。

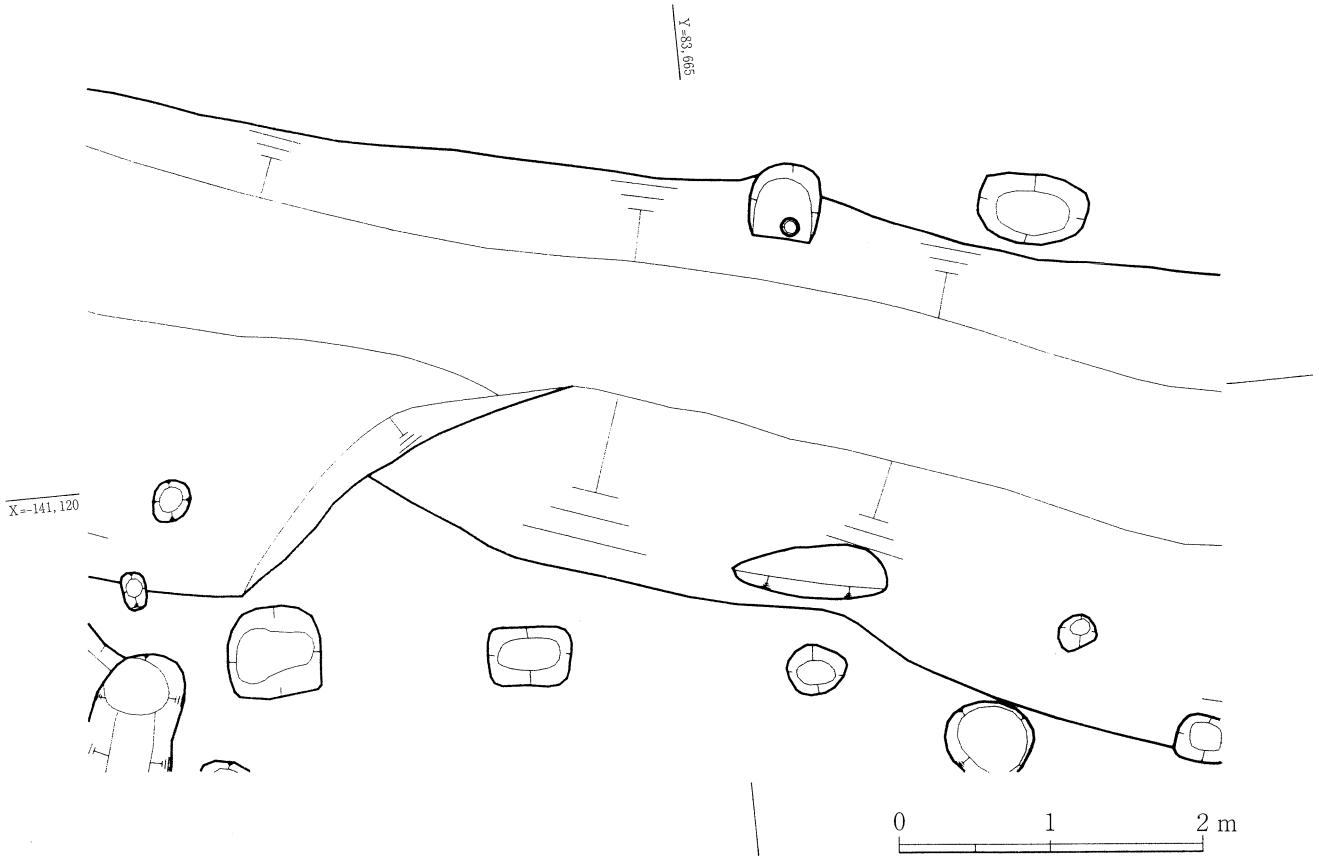
３号墳　調査区の南辺で検出した古墳である。南側が江戸時代頃の水田の段差で大きく損壊しているが、正方形ならば一辺約７ｍの方墳に復元できる。１号墳同様に墳丘上部はすっかり削られ、古墳築造時の旧表土と考えられる土がわずかに残っているだけであった。埋葬主体は墳丘の削平と水田段差の損壊で全く残っていなかった。古墳の主軸は南北方向から約20度西に振っている。

周濠（溝ＳＤ04）　周濠は南へ傾斜しており、さらに調査区外に続いている。溝の幅は一定しておらず、0.7～3.5ｍで、北側の最も深い部分は深さ約50cmである。また周濠のさらに外側には古墳の北東側で幅約５ｍ、北東側で幅約１ｍの自然地形を削り込んだ部分が確認された。この部分は２号墳の南面を切り込む様な状況であるため３号墳は２号墳より後に築造された可能性があるが、この地形が古墳を築造した当時の姿のままかどうかは不明である。

埋土は上から順に淡黄褐色粘質土塊と褐灰色粘質土塊と黄褐色粘質土塊が混和したもの、暗灰茶色粘質土、灰色砂混じりシルト、黒茶色粘質土、灰黄色土と続く。奈良時代の土器は出土しなかったものの最上部の埋土は整地土と考えられ、その時点で周囲に掘立柱建物群が建てられた可能性が高い。またその整地土を切り込んで、奈良時代頃と考えられる土坑ＳＫ03が周濠の上から掘り込まれている。周濠の２層目からは古墳時代後期の土師器・須恵器が出土したが、奈良時代頃の遺物は伴っておらず、奈良時代頃にはほぼ上部まで埋まっていたことを裏付ける。また周濠は１号墳周濠外側の自然地形を削り込んだ部分をさらに切り込んで掘削されているため、１号墳外側の地形が古墳を築造した当時のままの姿であるならば、



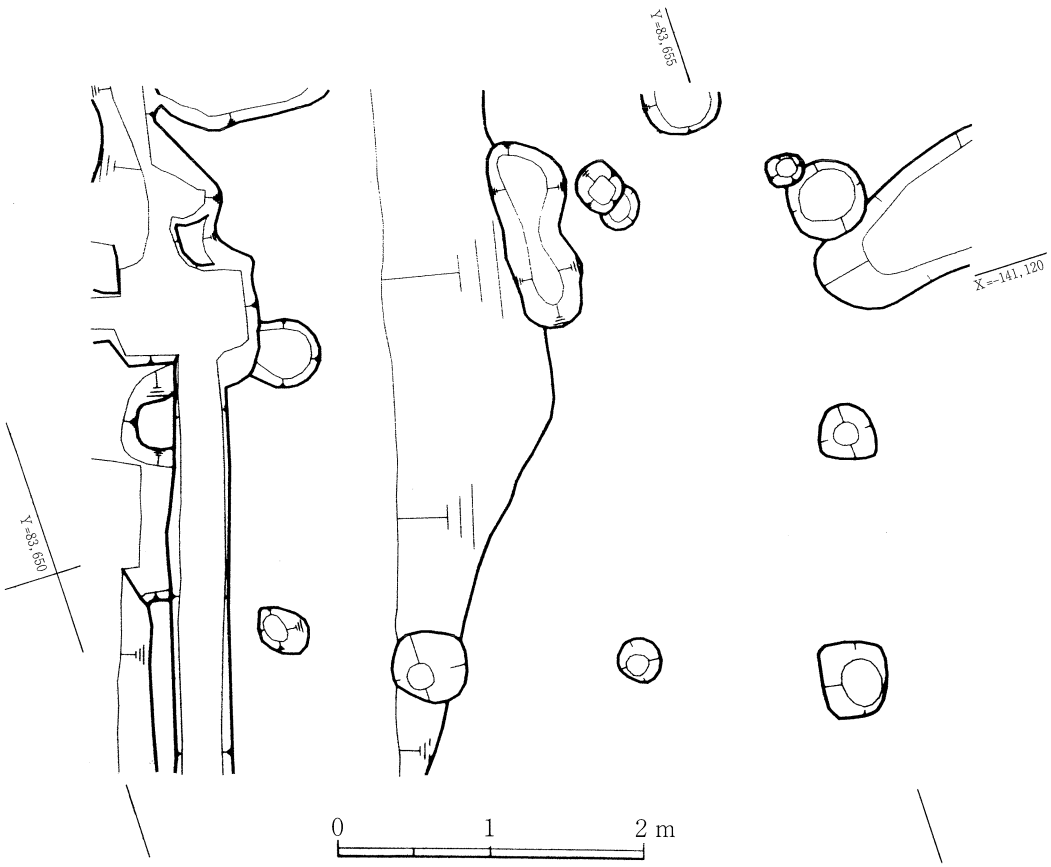
第10図　掘立柱建物ＳＢ01平面図（１:50）



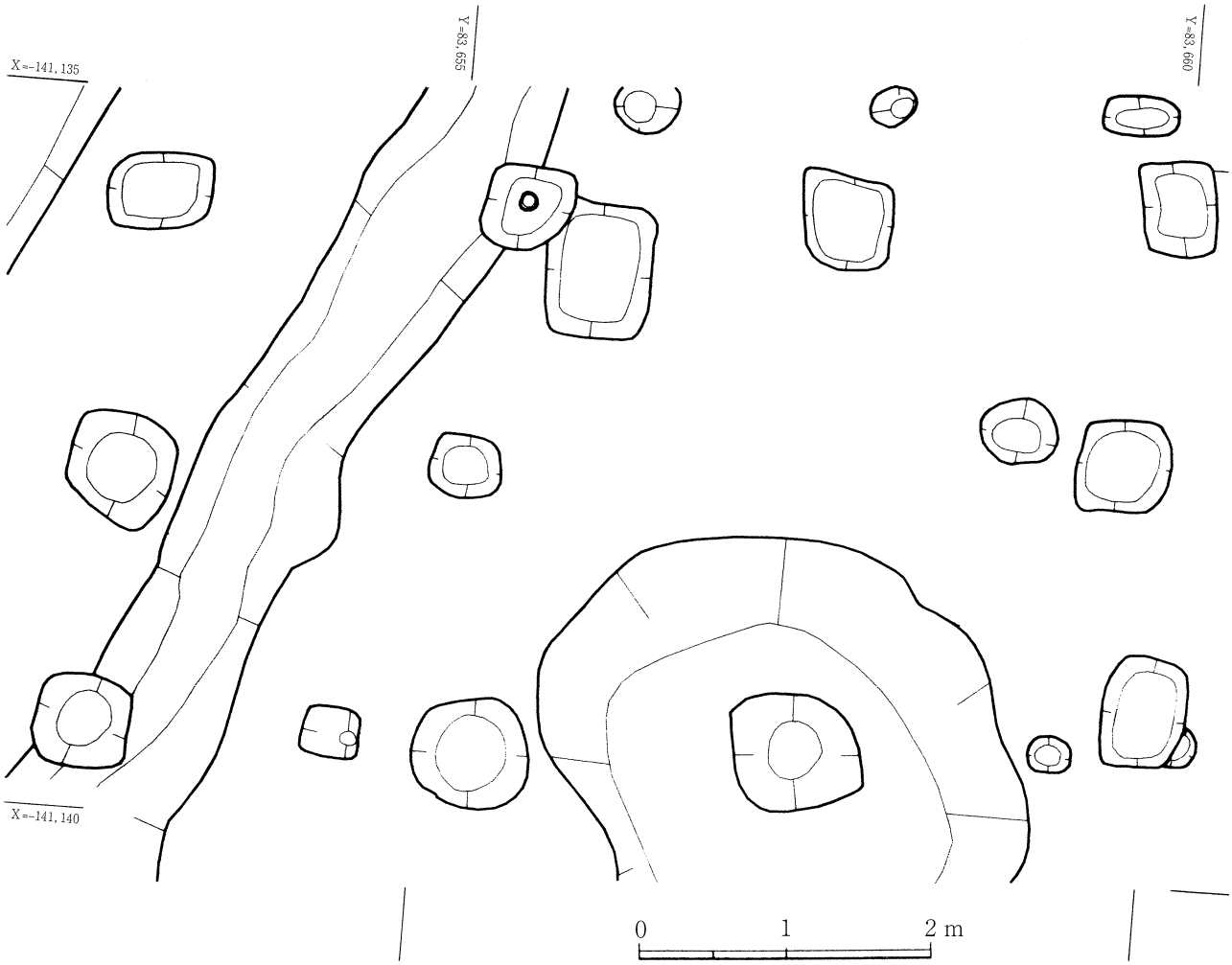
第11図　掘立柱建物ＳＢ02平面図（１:50）

３号墳の築造時期は１号墳よりも後ということになる。

掘立柱建物ＳＢ01　調査区の東辺、２号墳の南東隣で検出した掘立柱建物である。建物の東側は調査区外に続いているため全体の規模は不明であるが、現状では桁行３間（5.3m）×梁間２間以上（3.4m以上）である。北側柱列の東端



第12図　掘立柱建物ＳＢ03平面図（１:50）



第13図　掘立柱建物ＳＢ04平面図（１:50）

の柱穴は東壁直下で検出したものであるが、東側柱列の南北隅柱穴とは規模が小さいため、梁間は２間ではなく３間になる可能性が高い。柱の掘形は円形で、最も大きなものは掘形が直径約60cm、柱痕が直径約20cmである。西側柱列はきちんと直線になっていないが、棟の方向はＮ５°Ｗと計測できる。

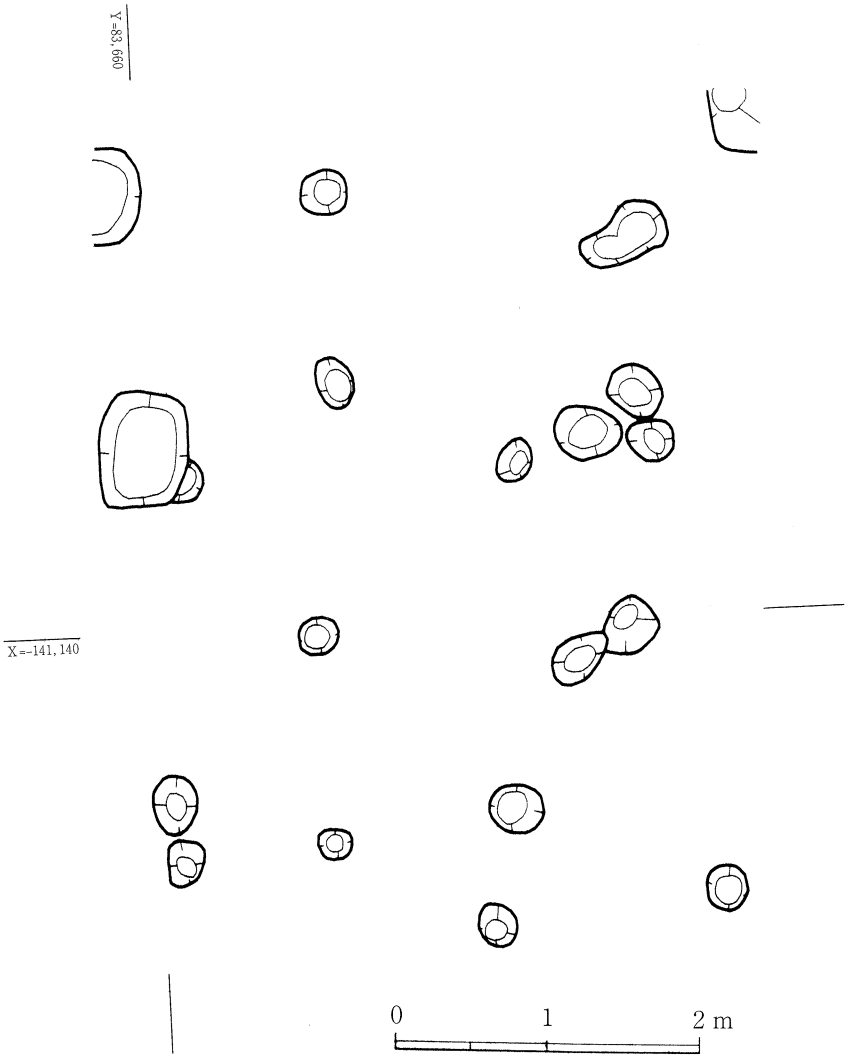
掘立柱建物ＳＢ02　調査区の北東隅、２号墳の北東隣で検出した掘立柱建物である。建物の中心部分が現代の撹乱で大きく破壊されているが、桁行３間(5.4m)×梁間２間(2.7m)の規模である。柱の掘形は隅丸方形で、最も大きなものは掘形が一辺約60cm、柱痕が直径約20cmである。南側柱列はきちんと直線になっていないが、棟の方向はＮ86°Ｗと計測できる。

掘立柱建物ＳＢ03　調査区の中央北寄、２号墳の北西隣で検出した掘立柱建物である。建物の西半が江戸時代頃の水田の段差や現代の撹乱で破壊されているため全体の規模は不明であるが、桁行３間(4.4m)×梁間２間(3.2m)に復元できる。柱の掘形は円形で、最も大きなものは掘形が直径約50cm、柱痕が直径約20cmである。西側柱列の南北両隅柱が存在していないが、現状では棟の方向はＮ71°Ｗと計測できる。

掘立柱建物ＳＢ04　調査区の南東寄、２号墳の南隣、３号墳の東隣で検出した掘立柱建物である。桁行３間(7.2m)×梁間２間(3.6m)の規模で、見つかった建物群の中では最も大きい。柱の掘形は隅丸方形で、しかも他の建物よりも深く大きく、最も大きなものは掘形が一辺約80cm、柱痕が直径約15cmである。解体される直前の時点では建物全体が傾いてしまっていた様で、柱痕はすべて西方向へ傾斜していた。少し平行四辺形気味ではあるが、棟の方向はＮ95°Ｗと計測できる。また柱穴が掘立柱建物ＳＢ06の柱穴を切っていた。

掘立柱建物ＳＢ05　調査区の南東隅で検出した掘立柱建物である。平面的には建物６と重複しているが、柱穴は切り合っていなかった。桁行２間(2.8m)×梁間１間(2.1m)で、小規模の建物である。柱の掘形は直径約20cmと小規模で、柱の方向も整っていない。時期は不明であるが、規模や柱穴の類似性から掘立柱建物ＳＢ06と同じ頃としておきたい。

掘立柱建物ＳＢ06　調査区の南東隅で検出した掘立柱建物である。平面的には掘立柱建物ＳＢ05と重複しているが、柱穴は切り合っていなかった。また柱穴が掘立柱建物ＳＢ04の柱穴で切られているため、それより古い建物であることが判明する。桁行１間(2.5m)×梁間１間(2.3m)で、小規模の建物である。柱の掘形は直径約20cmと小規模で、柱の方向も整っていない。



第14図　掘立柱建物ＳＢ05・06平面図(１:50)

建物群の時期　それぞれの建物の柱穴からは微量しか土器が出土しなかったため時期の判定が難しいが、建物を覆っていた遺物包含層からは奈良時代から平安時代の土器が出土しているため、それ以前の時期が想定できる。

溝ＳＤ02　調査区の東側で検出した溝である。南端は調査区外に続くため全体の長さは不明であるが、長さは17m以上、幅約100cm、もっとも深い部分は深さ約30cmである。埋土は場所による変化が著しく、水流に伴うラミネーションが顕著な部分や人頭大の礫を含む部分などがあって一定していない。上部からは飛鳥時代の土器が出土したが、古墳時代や弥生時代の土器も出土した。しかし溝の時期としては奈良時代の掘立柱建物ＳＢ04の柱穴が切っているため、現状ではそれより古い溝であるとしか決められない。

溝ＳＤ03　調査区の西側で検出した溝である。長さ10m、幅約30cm、もっとも深い部分は深さ約20cmである。埋土は上から順に黄褐色土小塊混じり淡灰色粘質土、暗灰茶色シルトである。土師器が微量出土した。１号墳北側の周濠北斜面に位置しているが、周濠がある程度埋まってから掘り込まれているため、周濠およびその周辺の出土遺物から判断して奈良時代頃の溝と考えられる。

土坑ＳＫ01　調査区の中央北寄で検出した長円形の土坑である。長径2.5m、短径1.0m、深さ約20cmで、埋土は上から順に暗灰茶色土、暗黄茶色砂質土である。古墳時代後期の土師器・須恵器が出土した。

土坑ＳＫ02　調査区の中央南辺、溝ＳＤ04を切り込む状況で検出した長方形の土坑で、長辺1.0m、短辺

0.8m、深さ約15cmである。埋土は淡茶灰色砂混じりシルトであるが、この土は土坑の被覆層でもあった。底面には薄く焼土と炭が分布しており、火を焚いた痕跡と判断できる。遺物は出土しなかったが、土坑ＳＫ03との類似性から奈良時代頃のものと考えられる。

土坑ＳＫ03　調査区の中央南辺、溝ＳＤ04を切り込む状況で検出した楕円形の土坑で、長径1.1m、短径0.8m、深さ約15cmである。埋土は土坑ＳＫ02と同じ淡茶灰色砂混じりシルトであるが、ここでは土坑の被覆層にはなっていなかった。やはり土坑ＳＫ02同様に底面には薄く焼土と炭が分布しており、火を焚いた痕跡と判断できる。遺物は土師器が微量出土したのみであるが、奈良時代頃の整地土と考えられる溝ＳＤ04の最上層を切り込んでいることから、この土坑も奈良時代頃の可能性が高い。

土坑ＳＫ04　調査区の南東寄で検出した不整円形の土坑である。直径約3.5m、深さ約80cm、埋土は上から順に淡橙黄色砂混じり土、黄茶色粘質土である。弥生土器が少量出土した。

落ち込みＳＸ01　調査区の中央北寄で検出した不整形の落ち込みである。長径4.5m、短径2.0m、深さ約20cmで、埋土は上から順に暗灰茶色粘質土、灰茶色砂混じりシルトである。古墳時代後期の土師器・須恵器の他、埴輪が出土した。落ち込みの周辺は既存建物の基礎等による破壊が激しいが、埴輪が出土したことを考慮するとこの近くにも古墳存在していたのか、あるいは埴輪を使った古墳祭祀の場所が存在した可能性がある。

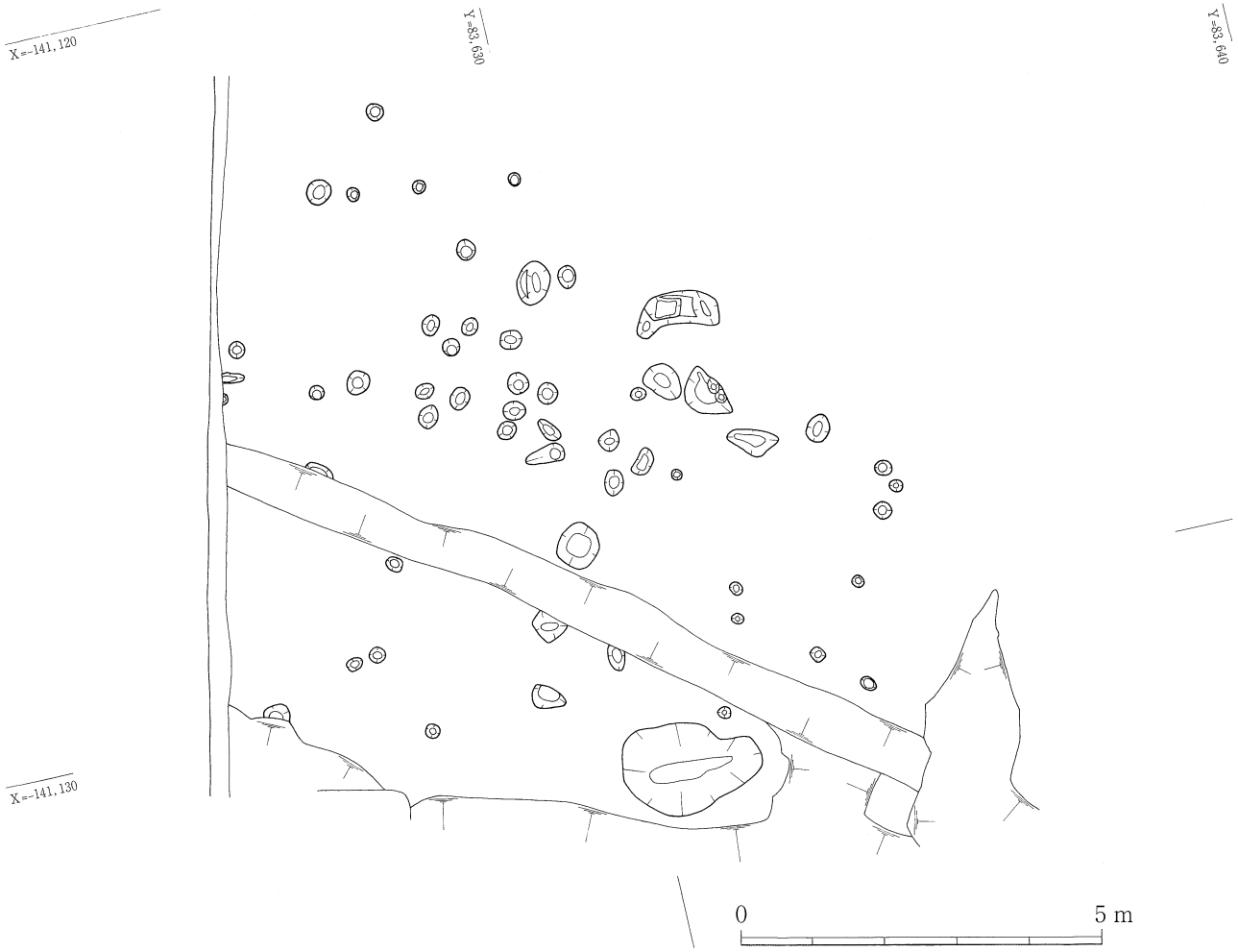
落ち込みＳＸ02　調査区の北東寄で検出した長卵形の落ち込みである。長径1.8m、短径0.9m、深さ約５cm、埋土は暗黄灰色砂質土である。遺物は出土しなかったが、掘立柱建物ＳＢ03の柱穴に切られているため、それより古いことが判る。

落ち込みＳＸ03　調査区の西寄、１号墳の東側裾近くで検出した不整形の落ち込みである。１号墳同様に南側が江戸時代頃の水田の段差で大きく破壊されているため全体の規模は不明であるが、長さ5.0m以上、幅1.2m、底面には凹凸が極めて顕著で、深さ70～90cmである。埋土は上から順に茶灰色粘質土、暗灰茶色土・暗黄茶色粘質土・褐灰色砂・淡黄茶色土が混和したもの、褐灰色砂である。２層目には拳大の石材や埴輪の大きな破片が多く含まれており、埋立土と考えられる。土師器・須恵器・埴輪が出土したが、それらは角が摩滅しているものばかりであった。古墳築造後のある時点で、大雨などで墳丘を切り込むように水の流れに伴って形成されたが、内部を埋め立てて墳丘を修復したと考えられる。

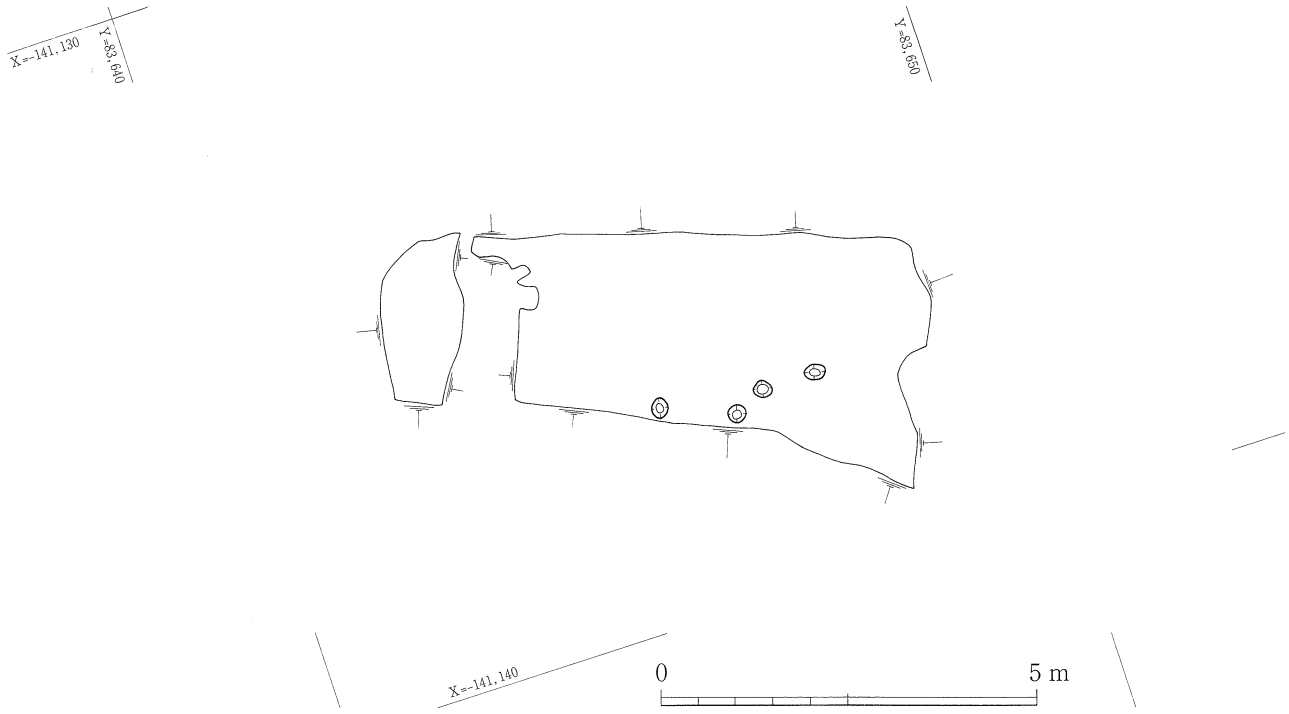
落ち込みＳＸ04　調査区の南辺、３号墳の墳丘上で検出した不整形の落ち込みである。３号墳同様に南側が江戸時代頃の水田の段差で破壊されているため全体の規模は不明であるが、長さ2.4m以上、幅1.4m、底面には凹凸が極めて顕著で、深さ20～40cmである。埋土は灰色粘質土で、弥生土器や古墳時代の須恵器とともに平安時代の黒色土器・須恵器が出土した。３号墳の墳丘が本来どの位の高さであったのかは不明であるが、ＳＸ03から平安時代の遺物が出土したことは、その頃までには３号墳の墳丘が地山近くまで損壊を受けていたことが判明する。

落ち込みＳＸ05　調査区の北東寄で検出した不整形の落ち込みである。南側が攪乱で破壊されているため全体の規模は不明であるが、長さ1.6m以上、幅0.7m、深さ20cmである。埋土は暗灰茶色粘質土で、土師器が少量出土した。

ピット　ピットは合計147基検出した。特に調査区の東寄の掘立柱建物ＳＢ04北側周辺と１号墳旧表土直下に集中していたが、調査区北西部分のように攪乱や削平が著しい場所にもかつて存在していたと考えられる。比較的浅いものが多かったが、中にはかなり深く、確実に柱穴になりうるものもあったが、建物などを構成するようにはまとまらなかった。



第15図　1号墳旧表土下遺構平面図（1：100）

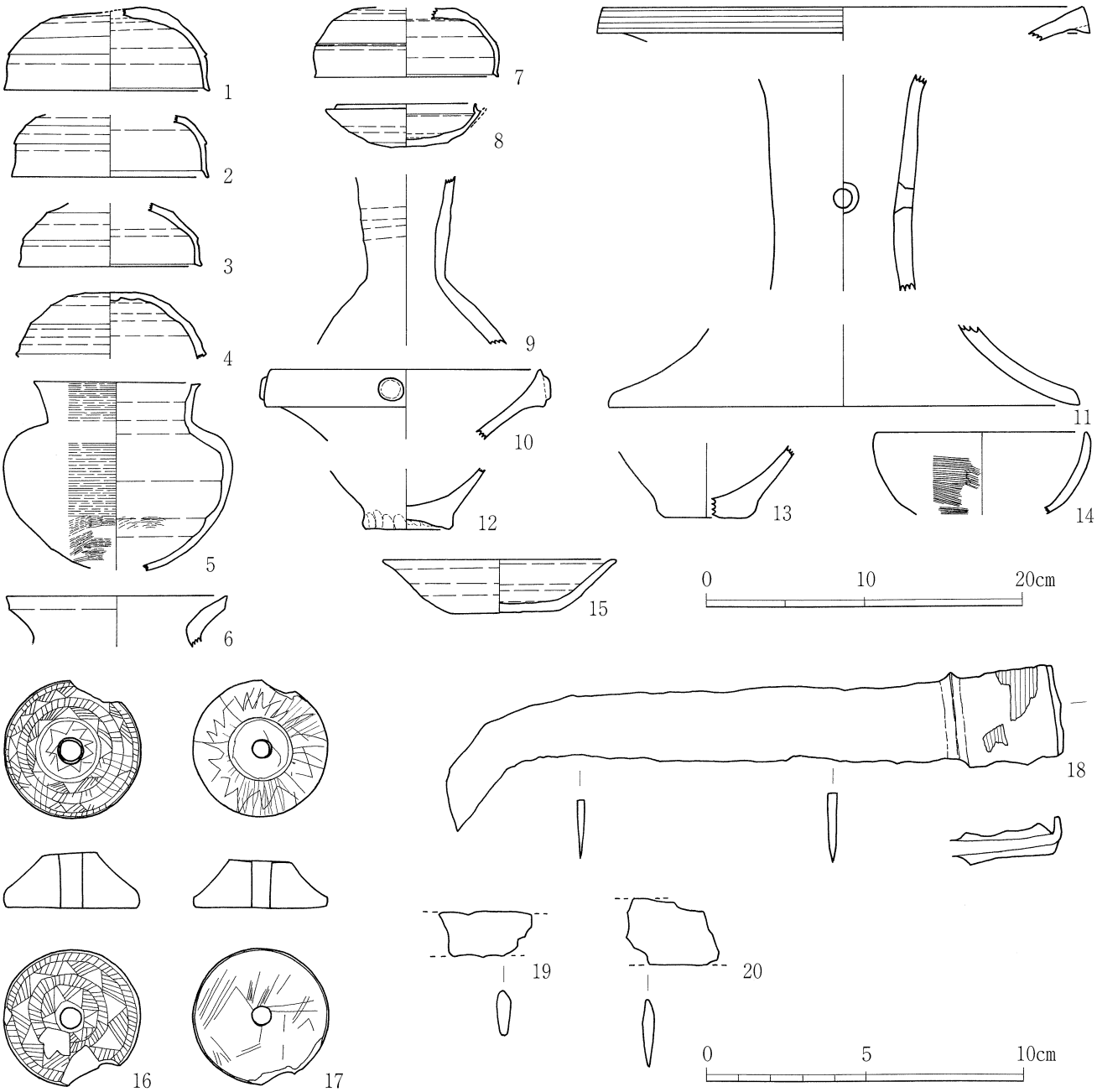


第16図　3号墳旧表土下遺構平面図（1：100）

第３節　出土遺物

遺物は現地調査終了時点で28リットル入りのコンテナで約10箱出土した。ここではそれらの中から主な遺構から出土した遺物と、遺跡の性格を考慮する上で必要な遺物について記述していく。

２号墳周濠（溝ＳＤ01）　１～４は須恵器杯蓋である。１以外は破片からの復元のため焼け歪みを含んでしまった可能性が残るが、２はＴＫ208型式、３・４はＴＫ47型式に相当する。しかしほぼ完形にまで接合できた１はＴＫ10型式に相当し、２号墳の築造時期は６世紀前半～中程を想定しておきたい。そして今回の調査では確認できなかったが、２～４の時期に古墳群が造営され始めた可能性が残る。16・17は滑石製紡錘車である。16は上下面ともに線刻の鋸歯文が丁寧に施されているが、17は上面に極めて乱雑な鋸歯文様の線刻



１～４・16～18２号墳周濠（溝ＳＤ01）、５・６３号墳周濠（溝ＳＤ04）、７～14・19・20溝ＳＤ02、15落ち込みＳＸ04

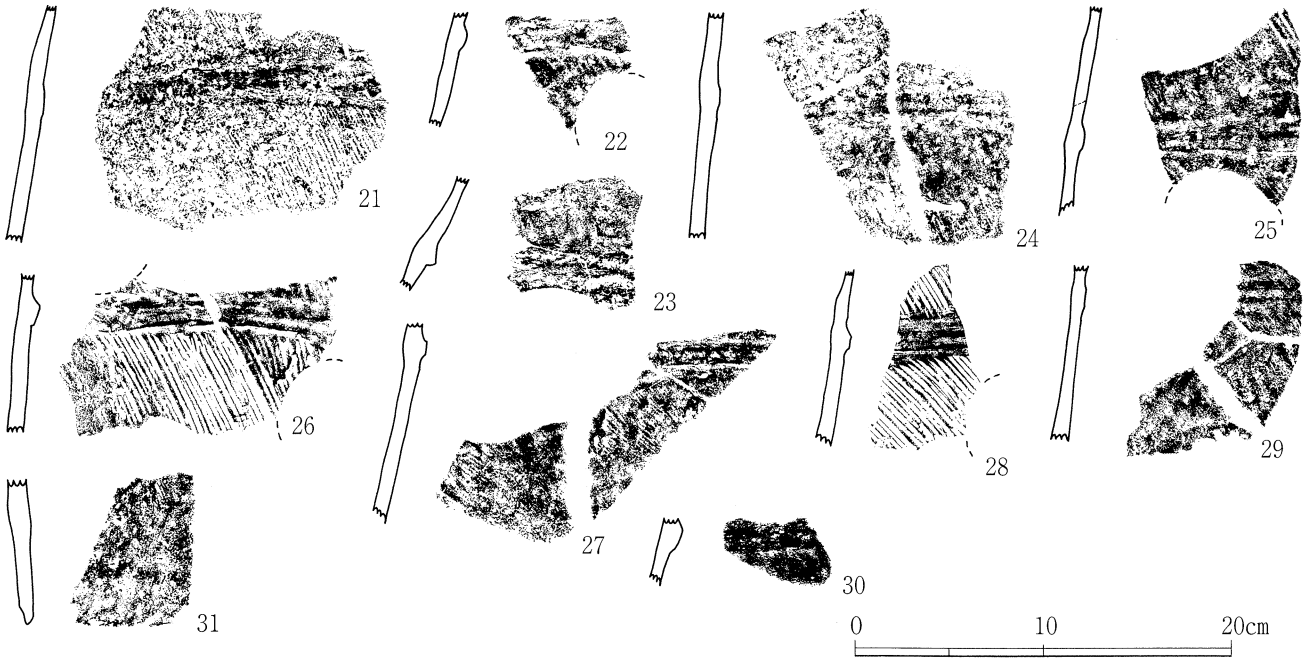
第17図　主な遺構の出土遺物（１：４・１：２）

を施すのみである。下面には意図的な文様かどうか疑わしい浅い線が多数存在する。18は鉄製鎌である。柄の部分には木質が遺存している。柄に開けた穴に鎌を通し、端部を折り曲げて固定している。木質の繊維の方向と固定用の折り曲げ部分から、柄と刃の角度は97°と計測できる。

3号墳周濠(溝ＳＤ04)　5は須恵器壷である。ある程度形状の復元できた須恵器はこの1点のみである。底部中心が欠失しているが、供献時に穿孔された可能性がある。6は弥生土器壷の口縁部であるが、古墳の周濠内に古い時代の土器が混入したものである。

ＳＤ02　7は須恵器杯蓋で、ＴＫ47型式に相当する。8は須恵器杯身である。外周の約6分の1が人為的に磨り減らされて平らになっている。ＴＫ217型式の古相に相当する。9は須恵器長頸壷の体部上半～頸部である。頸部の2条の凹線はかなり退化しており、痕跡程度に浅くなっている。ＴＫ209型式頃に相当する。10は弥生土器壷の口縁部で、円形付文を持つ。11は弥生土器器台である。口縁部・脚柱部・脚端部のみの破片で接合点がなく、本来の器高は復元できていない。口端部に浅い沈線が4条、脚柱部に円形の透かし孔があるが、透かし孔の個数は不明である。12は弥生土器壷の底部で、接地部分内外面の指頭圧痕が顕著である。13は弥生土器甕の底部である。14は弥生土器鉢もしくは高杯の杯部である。外面はハケが残るが内面のナデは極めて丁寧である。

ＳＸ03　21～31は円筒埴輪で、本来1号墳に伴っていたものである。31はあまり厚さがないが、後述する32～35との違いから底部と判断した。口縁部から底部まで完全に復元できるものは全く存在せず、1個体の高さ及びタガ間の段数も明らかにはならなかった。しかも全体的に器表の遺存状況が悪く、摩滅して調整が不鮮明なものが多い。しかし図示していない破片を含めても黒斑を持つ破片は1点も存在しなかった。さらに22・25・26・28・30は須恵質に焼きあがっている。透かし孔は円形で、22・25・26・28で確認できた。中でも26は上下2段分の透かし孔が確認され、その配置状況から上下では90°方向を変えて穿孔されていたことが判明した。外面調整は左上から右下方向へ斜め方向にハケを施した後にタガの部分を接合し、タガの前面・上面・下面を同時に指でナデている。ハケの二次調整は施されていない。内面調整は粘土紐の接合部分を指頭で圧着した後、外面にタガ部分を接合すると同時にその内面部分をさらに指頭で圧着している。そし

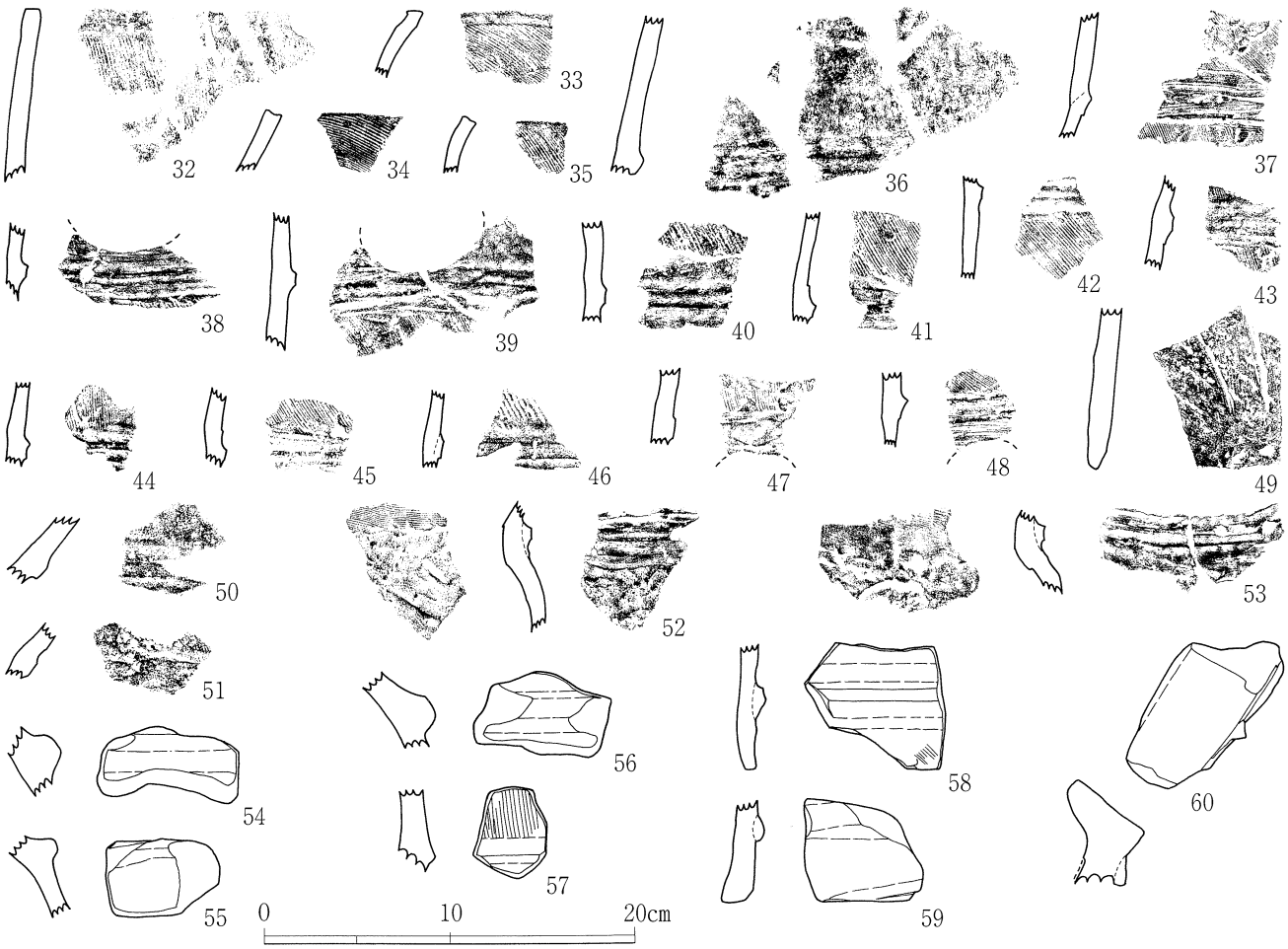


第18図　落ち込みＳＸ03出土埴輪(1：4)

てさらにその後で右下から左上方向へナデているが、28はナデの方向が下から上方向に近かった。タガ部分での直径が復元できたものは７点で、21が18.6cm、22が18.2cm、23が12.6cm、24が17.0cm、25が14.4cm、26が14.0cm、27が12.8cmである。17～19cmと12～15cmの２グループの大きさに大別することが可能で、１個体の段構成数は不明であるが、上位のタガ部分と下位のタガ部分の直径の差が読み取れる。時期が判別できるような土器は伴っていないが、埴輪の時期は焼成や調整、タガの突出度、直径の小ささから判断し、Ⅴ期の中でも６世紀前半から中頃と考えられる。

ＳＸ04　15は須恵器杯である。９世紀後半頃の年代が想定できるが、その頃には３号墳の墳丘が地山近くまで損壊を受けていた証拠でもある。

遺物包含層等出土埴輪　遺物包含層と１号墳周濠からも円筒埴輪・形象埴輪が多数出土した。しかしこれらは後述する奈良時代後半～平安時代前半頃の土器類と完全に混在した状態で出土したため、純粋な古墳時代の堆積ではない。しかし遺物包含層やさらにその上の旧耕作土から出土した埴輪も基本的に１号墳の近くからのみ出土しており、２・３号墳に伴う埴輪ではないことは明らかである。32～49は円筒埴輪である。32～35は口縁部で、49はあまり厚さがないが、口縁部との違いから底部と判断した。ＳＸ03同様に口縁部から底部まで完全に復元できるものは全く存在せず、１個体の高さ及びタガ間の段数も明らかにはならなかった。器表の遺存状況はＳＸ03程ではなかったが悪いものもあった。図示していない破片を含めても黒班を持つ破片は１点も存在しなかったことはＳＸ03と同様であるが、図示したものの中には明確に須恵質に焼きあがっ



32・36・39・40・50・54・57～59遺物包含層、33～35・37・38・41～49・51～53・55・56１号墳周濠、60旧耕作土

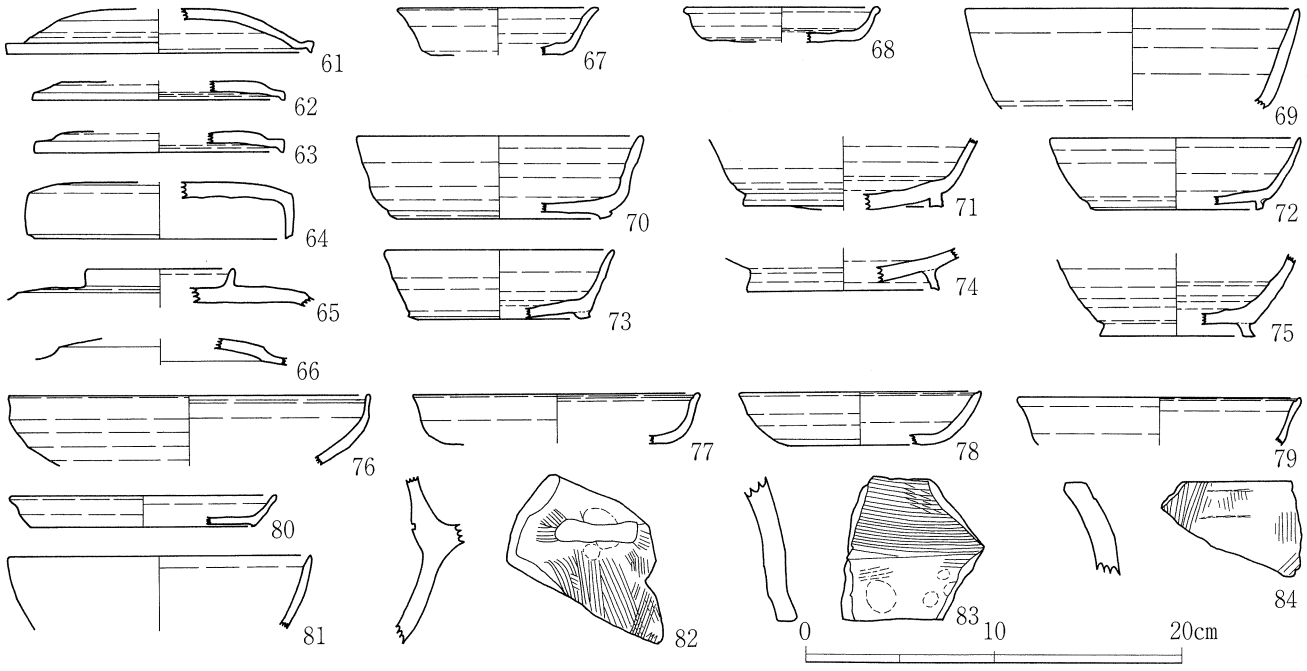
第19図　遺物包含層等出土埴輪（１：４）

ているものはなかった。透かし孔は円形で、38・39・47・48で確認できた。調整は基本的にＳＸ03と同様で、左上から右下方向へ斜め方向にハケを施した後にタガの部分を接合し、タガの前面・上面・下面を同時に指でナデている。ハケの二次調整は施されていない。しかし44・47はタテハケといった方がよい位の角度である。内面調整は粘土紐の接合部分を指頭で圧着した後、外面にタガ部分を接合すると同時にその内面部分をさらに指頭で圧着している。そしてさらにその後で右下から左上方向へナデているが、41はナデの方向は下から上方向に近かった。口縁部もしくはタガ部分での直径が復元できたものは７点で、32が29.2cm、33が19.8cm、36が24.4cm、37が19.2cm、38が18.2cm、39が13.8cm、40が13.4cmである。口縁部は約20cm以上で、タガは36と18～20cm、13～14cmの３グループの大きさに大別することが可能である。１個体の段構成数は不明のままであるが、ここでＳＸ03での２グループと上下２段に透かし孔を持つ個体が存在する事実を加味すると、あくまでも推測の域を出ないものの、直径の数値分布から判断して円筒埴輪はタガが３条で、透かし孔を持つ部分が２段、それに口縁部と基底部を加えた４段構成であった可能性が考えられる。埴輪の時期ＳＸ03同様に、Ⅴ期の中でも６世紀前半から中頃と考えられる。

50～53は朝顔形円筒埴輪で、すべて土師質である。52・53の屈曲部内面上部にはハケが施されていた。タガ部分での直径が復元できたものは３点で、51が15.0cm、52が11.4cm、53が13.0である。上下方向にはこれ以上接合できなかったが、図示した部分以下は円筒埴輪と判別が付かないと考えられる。

54～56朝顔形円筒埴輪の肩部分の可能性もあるが、50～53と比べてタガの大きさが異なるため蓋形埴輪としておきたい。しかしいずれも器表の遺存状況が悪く、調整は不明である。57～60は家形埴輪で、57は壁部分、58・59は壁裾部分、60は破風部分である。

遺物包含層等出土須恵器・土師器　61～63は須恵器杯Ｂ蓋である。64は須恵器壷Ａ蓋である。65・66は器形が異なるがどちらも金属器を模倣した須恵器の蓋である。特に66の調整は内外面ともに極めて丁寧にナデられている。67・68は須恵器杯Ａである。69は須恵器杯Ｅである。内外面ともに極めて丁寧にナデられている。70～73は須恵器杯Ｂである。71は高台下端よりも杯部外底面が下がっている。74は須恵器杯Ｆである。

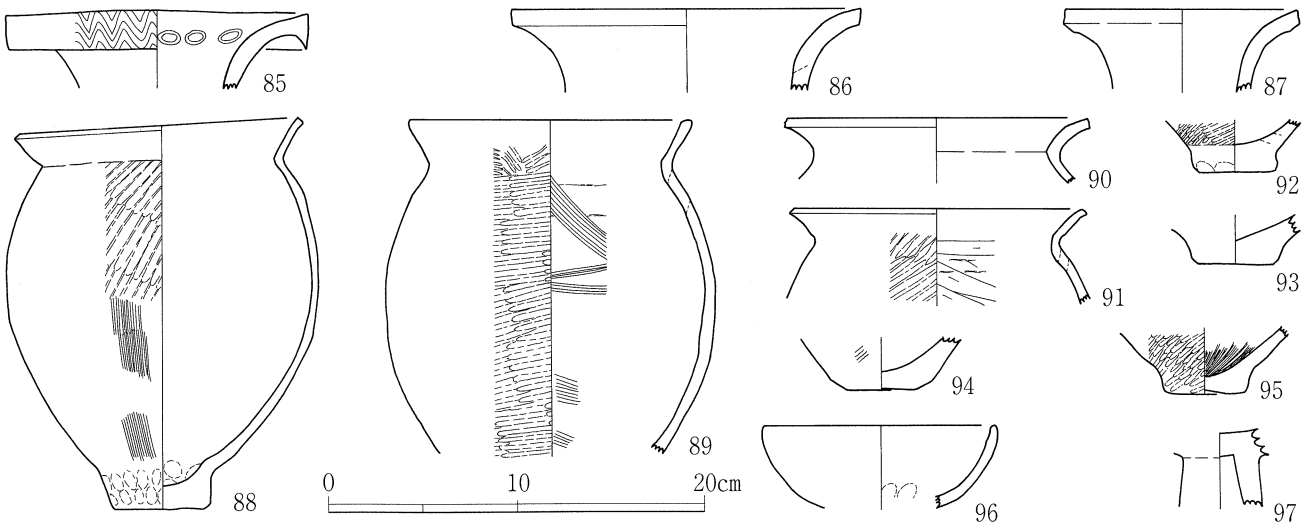


61掘立柱建物ＳＢ01北西隅柱横ピット、62～77・79～84遺物包含層、78１号墳周濠

第20図　遺物包含層等出土須恵器・土師器（１：４）

高台内部の杯部外底面はそれ程でもないが、高台部分から外面、特に杯部内面は極めて丁寧にナデられている。75は須恵器壷の底部である。上部が欠失しているため壷の形状は不明であるが、杯Ｂの内面調整とは異なるため壷とした。76～79は土師器杯Ａである。強弱の違いはあるがどれも口端部内面直下に１条の凹線を持ち、口縁部外面に強いナデを施している。内面には暗文は確認できなかった。80は皿Ｂで、口縁部外面に強いナデを施している。また内面には暗文は確認できなかった。81は黒色土器Ａ類の椀である。口端部内面直下を面取りするように薄くし、口端部を尖らせ気味に作っている。内面には暗文は確認できなかった。82は土師器甕の取手部分の破片である。取手の大部分は欠失しているが遺存している基部の調整から、指頭で器壁に圧着した後ハケで表面を整えていることが判明する。内面には外面より粗いハケが施されているが、丁度取手部分の内面に長さ14㎜、幅２㎜、深さ２㎜の長方形の窪みが１つ存在する。窪みはこの粗いハケを切り込んでいるが、窪みの機能としては取手部分の圧着時に土器本体が歪むのを防ぐ支えと考えられる。83・84は土師器竈で、83は脚端部、84は上端部の破片である。接近して出土しているが、同一個体かどうかは不明である。ともにハケの後、指頭圧痕及びナデで仕上げているが、84の外面には粘土紐の接合痕跡が残っている。以上これらの土器は特定の時期に限定できるのではなく、奈良時代後半～平安時代前半の間で捉えることができよう。

遺物包含層等出土弥生土器　85～87は壷である。85の口端下垂部には５条の櫛描文が施され、内面には竹管状工具で円形のスタンプ文が３個押されている。88～95は甕である。88の外面は粗いタタキを施すが、下半部はタタキをハケで消している。底部内外面には指頭圧痕が顕著である。89の外面は口縁部までタタキを施した後にナデて整えている。内面はハケであるが、粗くしか施されておらず、粘土紐の接合痕跡が残っている。91は内面をヘラケズリで整えている。95の外面は接地部分までタタキが施され、内面最下部は右上がり気味のヘラミガキを施している。上部を欠失しているが、ミガキの存在から鉢になる可能性も考えられる。96は鉢もしくは高杯の杯部である。口端部内面直下には強いナデが、内面下端部には指頭圧痕が施されている。97は高杯脚柱部である。遺存状況が悪いが杯部内底部のナデは極めて丁寧である。これらの弥生土器は後期を中心とするが、後期でもある程度の時間幅を持つようである。また今回図示できなかったが、出土した弥生土器の中には少量ではあるが中期のものも含まれていた。



85・90・97１号墳旧表土、86・87・89・92～96遺物包含層、88掘立柱建物ＳＢ04北側ピット、91掘立柱建物ＳＢ04東妻内側ピット

第21図　遺物包含層等出土弥生土器（１：４）

第Ⅲ章　まとめ

今回の発掘調査では古墳時代後期の古墳群が確認された。古墳は１号墳が円墳で、２・３号墳が方墳である。しかも１号墳は埴輪を持つ古墳であった。これまで調査地点周辺には古墳の存在は全く確認されていなかった。ただ阪急の線路南側の御影町西平野字伊賀塚には「伊賀塚」という古墳がかつて存在していたと伝えている江戸時代の文献(『攝津誌』、享保年間(1717～1736)刊行。『摂津名所図會』、寛文８年(1796)～10年(1798)刊行。)がある。後世に削平されて消滅したため、現状では古墳の存在は全く確認できない。したがって文献に記載されたものが間違いなく古墳であるのか、あるいはそれ以外の塚であるのかは今となっては確認の方法はない。調査地点と御影町西平野字伊賀塚とは少し距離が離れており、しかも間に新田川が流れているが、「伊賀塚」と伝える古墳と今回確認された古墳群が同じ古墳群の別支群であった可能性もある。市内の六甲山系南麓にはまだまだ未確認の古墳が住宅地の地下に埋没していると推察される。

また概ね同じ時期の古墳群として、同じ東灘区内の住吉宮町古墳群を挙げることができる。住吉宮町古墳群では一般構成墳は方墳で、主墳となるものは前方後円墳もしくは帆立貝式古墳であることが確認されている。今回確認された古墳群のうち、円墳は全周が検出されたのではなく、さらに江戸時代頃の水田の段差で大きく破壊されている状況である。復元直径が比較的大きいこと、これのみ埴輪が樹立されていたことを考慮すると、仮に住吉宮町古墳群と古墳構成が同じであるとすれば、１号墳が本古墳群の主墳で、前方後円墳もしくは帆立貝式古墳であった可能性も考えられる。

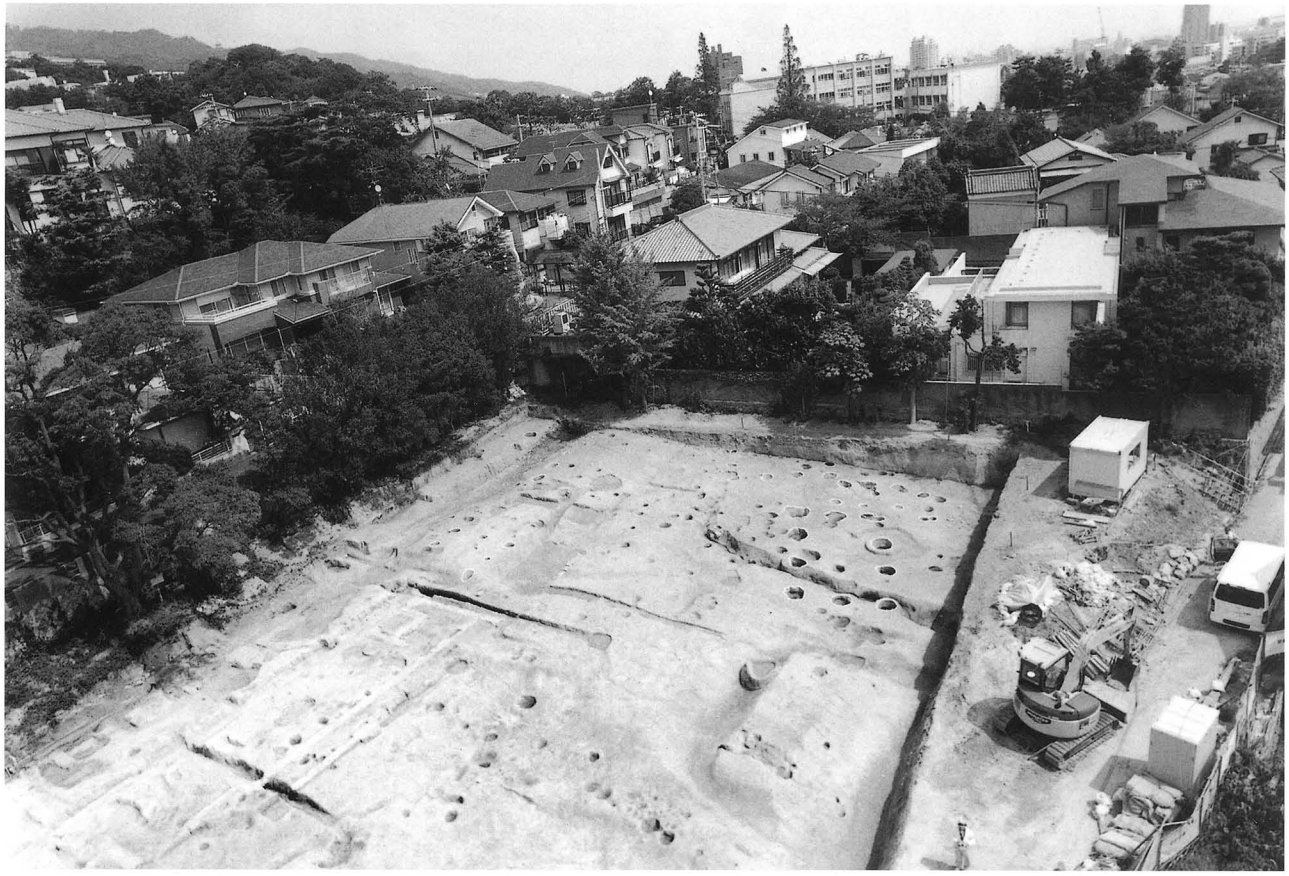
調査区内の堆積土層から判断して、これらの古墳は中世のある時点で周辺一帯が耕地化した際に完全に地上から姿を消したと思われるが、１号墳の埴輪の出土状況や２号墳と掘立柱建物群の配置、３号墳周濠の堆積状況から、古墳の周囲に掘立柱建物群が建てられた奈良時代頃にはかなり墳丘に手が加えられ、削平が進行していたことが推定できる。

掘立柱建物は６棟確認されたが、そのうち奈良時代頃の建物は４棟である。これらの建物は柱穴の切り合いが確認されなかったため、建物の同時性は不明であるが、掘立柱建物ＳＢ03のみ少し棟方向が異なるため時期が異なる可能性がある。奈良時代以前の建物は２棟で、規模の小さいものである。

古墳の墳丘に柱穴を掘り込む掘立柱建物こそ確認されなかったが、掘立柱建物群が建てられた頃に古墳の上部をかなり損壊していたと推定できる。ただこの事実は極めて重要な意味を有している。奈良時代から平安時代頃の掘立柱建物は山手幹線南側の郡家遺跡でも確認されている。郡家遺跡は弥生時代から平安時代にかけての大規模複合遺跡であるが、当該時期には菟原郡衙存在していたと考えられており、古代における中心地の一つである。そのまさに同じ頃の建物が尾根直下の南西斜面地に建てられおり、さらに近くに存在していた古墳を損壊してまで建物周囲の平坦地を作る必要があったということになる。江戸時代の新田開発以降では水の入手は容易になったであろうが、それより遥か以前の古代では決して容易であったとは言えない。また居住するには至近地で広い耕作地を確保することも困難と思われる。すなわち決して生活するには良好な条件ではない場所に敢えて建物群を建てたことになる。その理由は明確ではないが遺跡の立地条件を考慮すると、南側緩斜面地に存在した郡衙周辺あるいは海を見下ろす意図を有していた可能性もうかがえよう。

弥生時代の遺構もいくつか確認されている。また埴輪や奈良時代の土器に混じって弥生土器も出土している。それらの時期は弥生時代中期から後期のものである。現状では竪穴住居など居住の痕跡が確認されたのでないが、出土した土器の量から推察して近くに弥生時代の集落が存在していた蓋然性が極めて高い。現在では宅地造成で完全に消滅した北側の尾根筋上に、かつて高地性集落が存在していた可能性も考慮されよう。

写真図版1



1．調査区全景（南西から）

2．調査区全景（俯瞰）

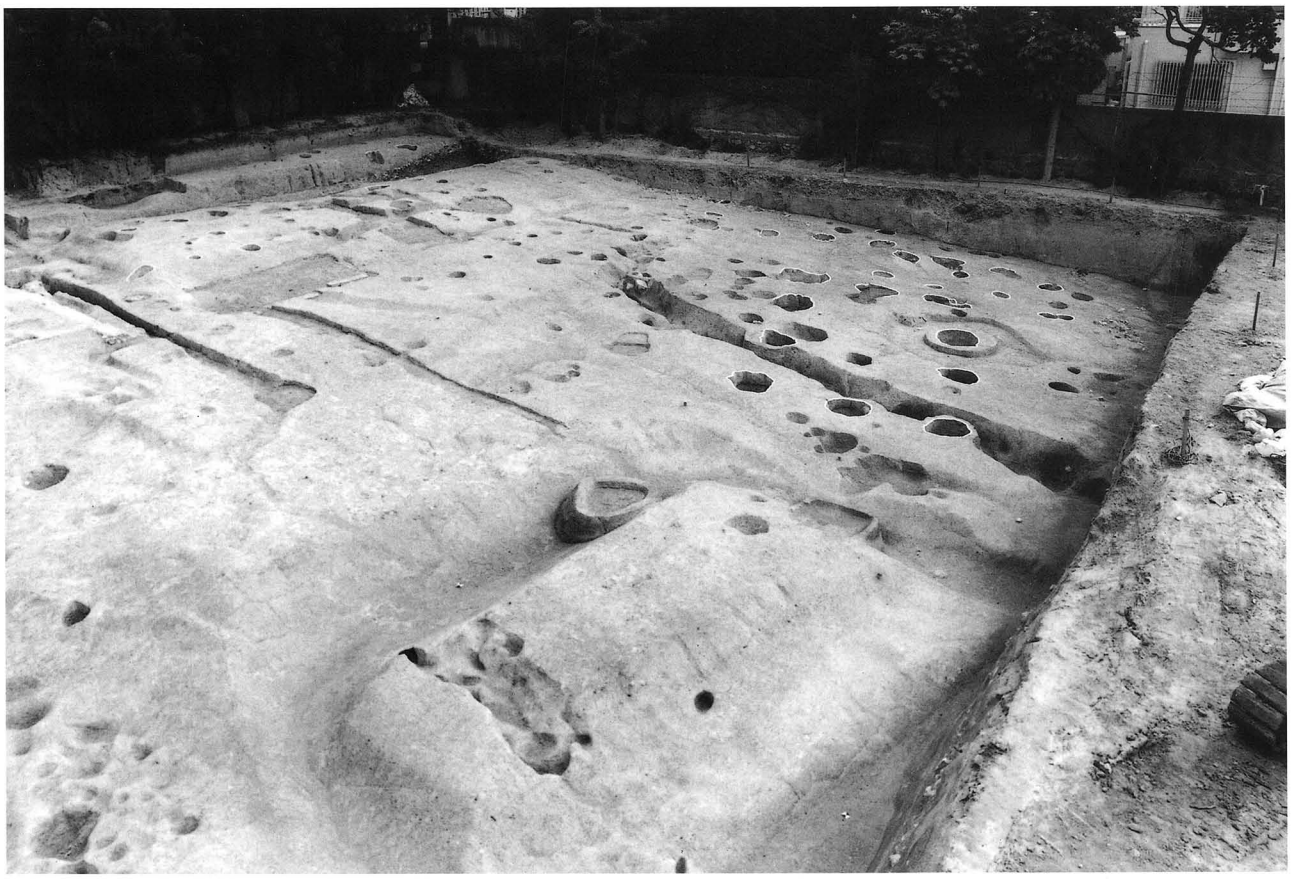
写真図版２

１．古墳群(東から)

２．古墳群(１・３号墳)(南東から)

写真図版 3

1．古墳群と掘立柱建物群(南東から)



2．古墳群と掘立柱建物群(南西から)

写真図版 4

1．掘立柱建物群(南から)

2．掘立柱建物群(北西から)

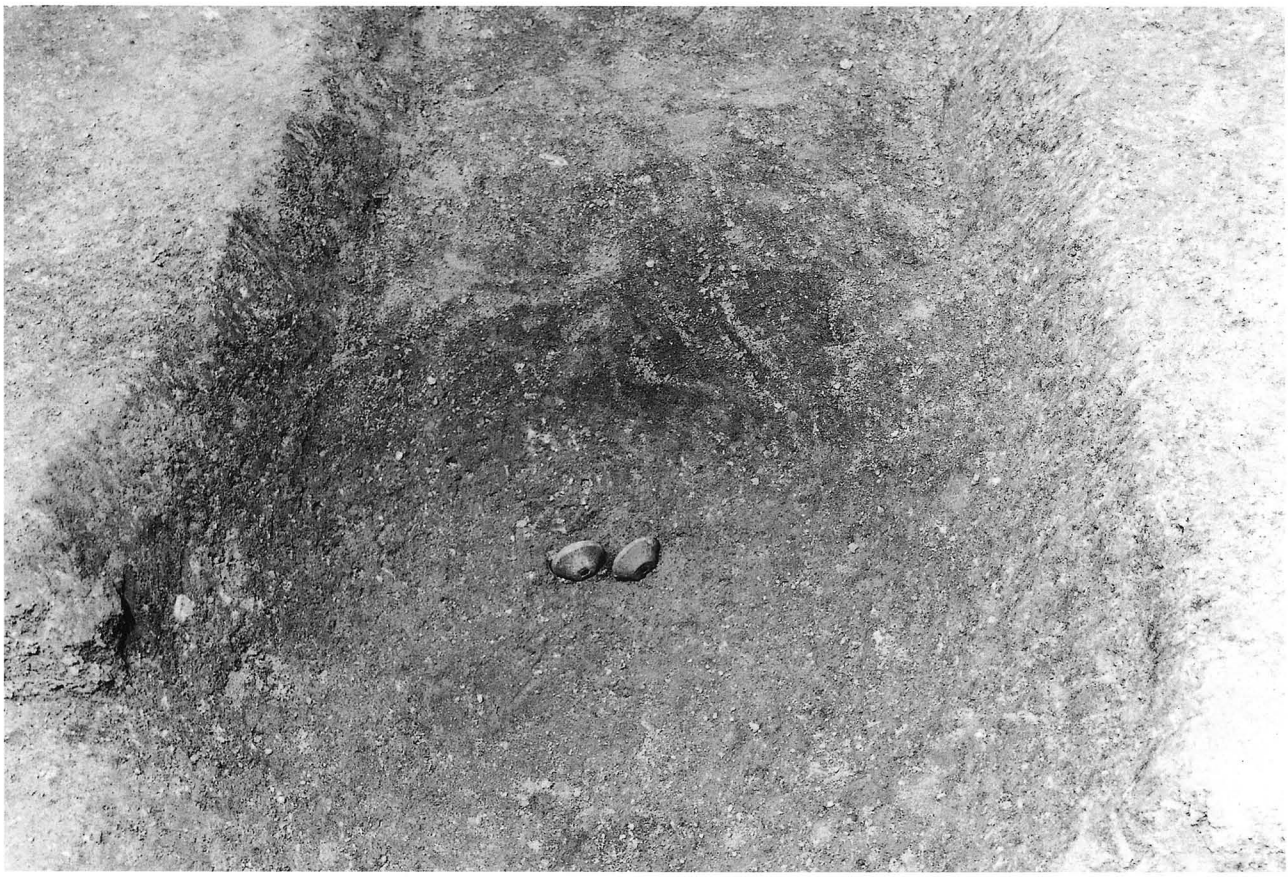
写真図版５

１．１号墳(南東から)

２．１号墳周濠(南東から)

写真図版6

1．2号墳(南から)



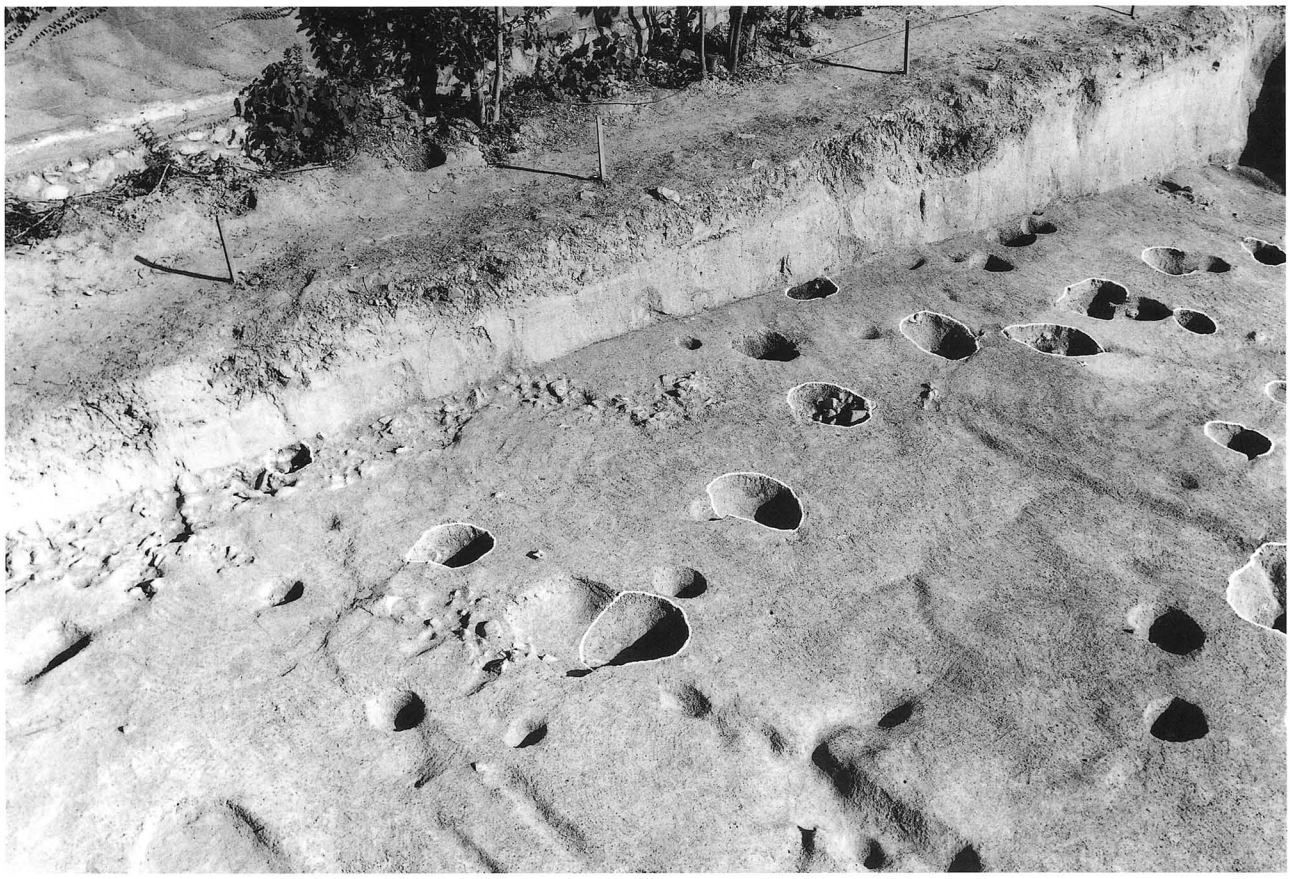
2．2号墳周濠(溝SD01)滑石製紡錘車出土状況(東から)

写真図版７

１．２号墳周濠（溝ＳＤ01）鉄製鎌出土状況（南から）

２．３号墳（南から）

写真図版 8



1．掘立柱建物ＳＢ01(北西から)

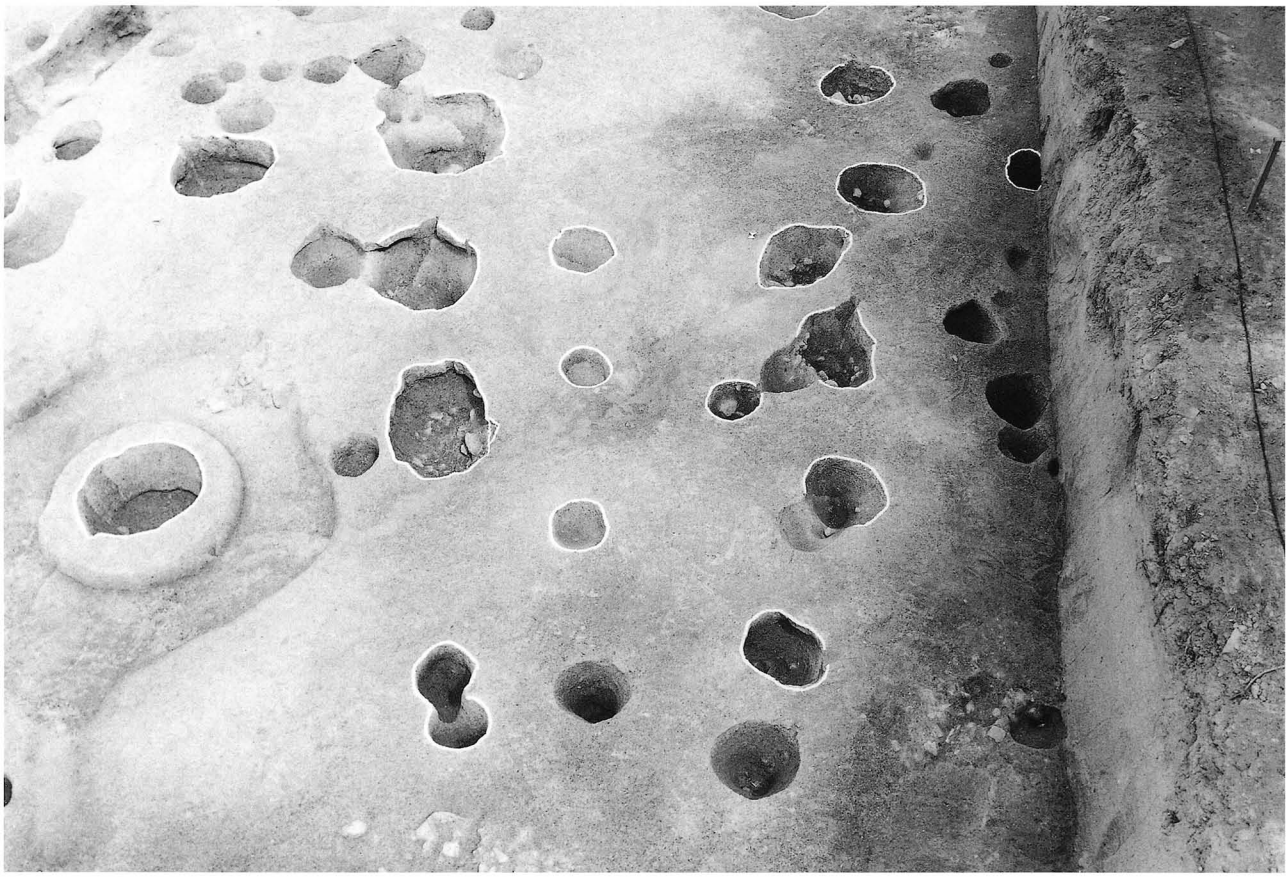
2．掘立柱建物ＳＢ02(南東から)

写真図版９

１．掘立柱建物ＳＢ03(南東から)

２．掘立柱建物ＳＢ04(南東から)

写真図版10



1．掘立柱建物ＳＢ05・06(南から)

2．溝ＳＤ02(南から)

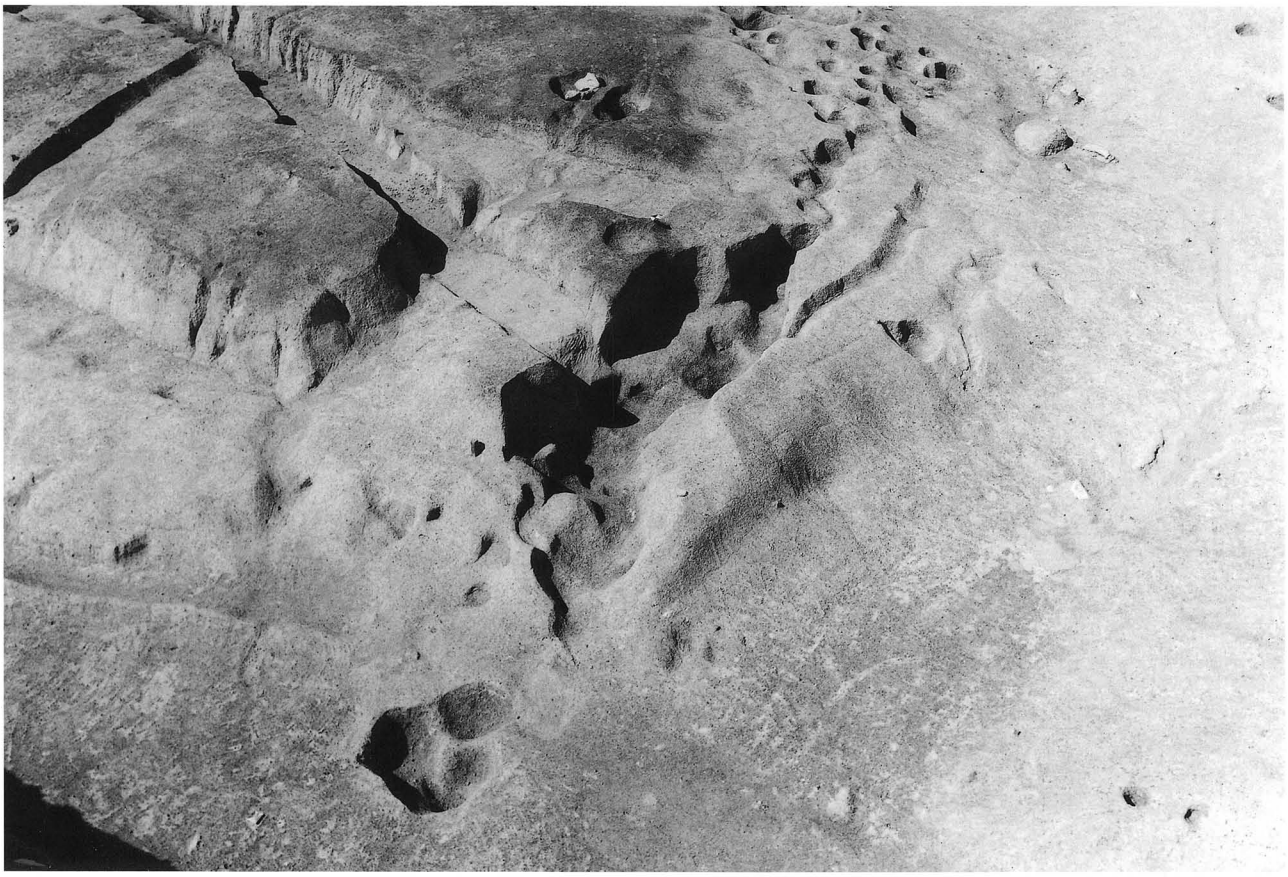
写真図版11

1．溝ＳＤ03(東から)

2．土坑ＳＫ01・落ち込みＳＸ02(南西から)

写真図版12

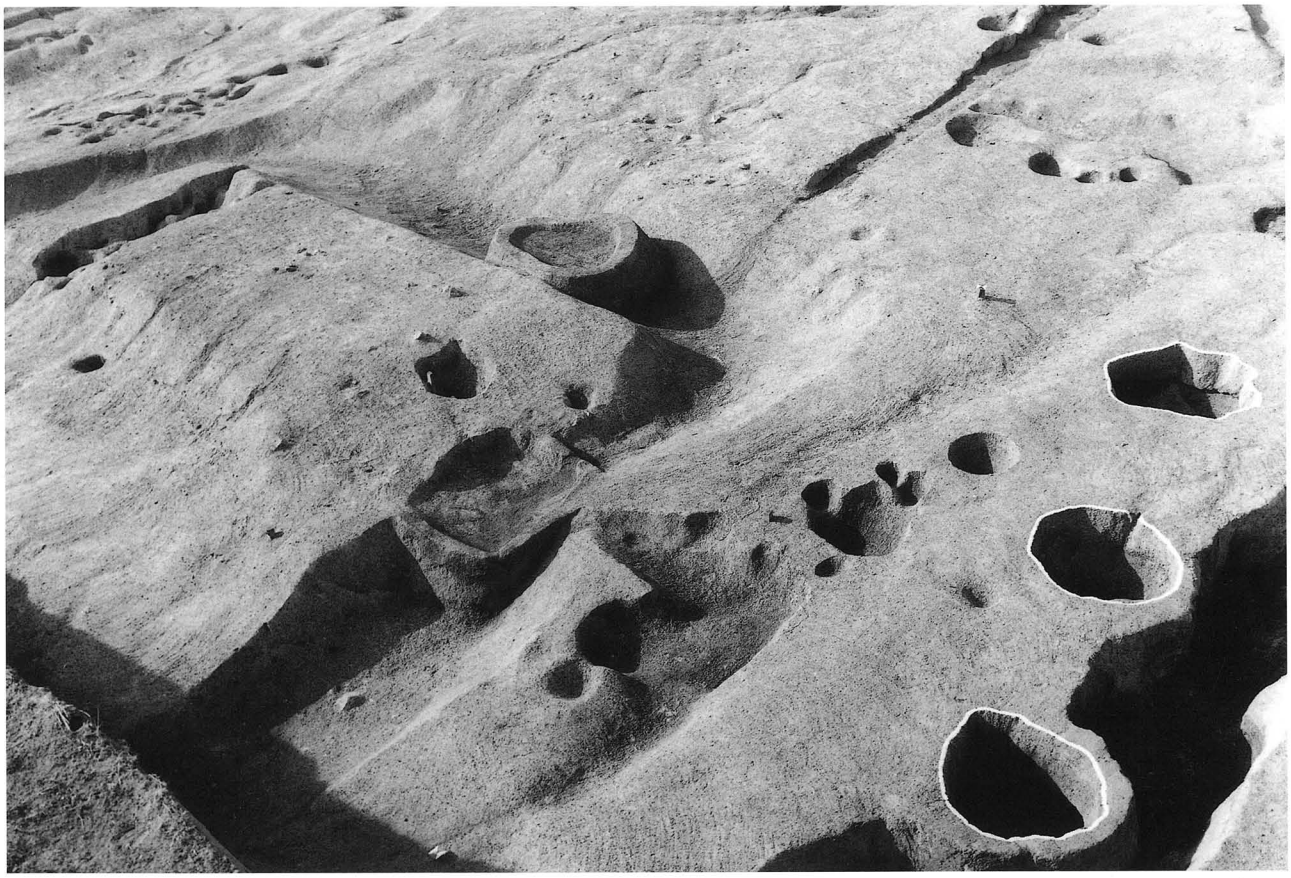
1．落ち込みＳＸ01(南から)



2．落ち込みＳＸ03(南東から)

写真図版13

1．落ち込みＳＸ04(南西から)



2．ＳＫ02・03(南東から)

写真図版14

1．1号墳旧表土下遺構（南東から）

2．3号墳旧表土下遺構（南西から）

1

8

9

2

3

3

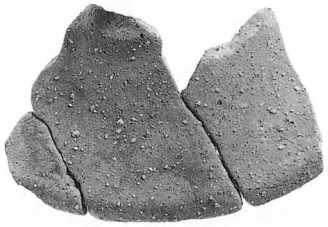
4

2

2

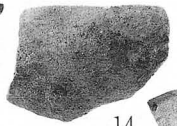
17

16


11

18

90


14

7

12

13

19

20

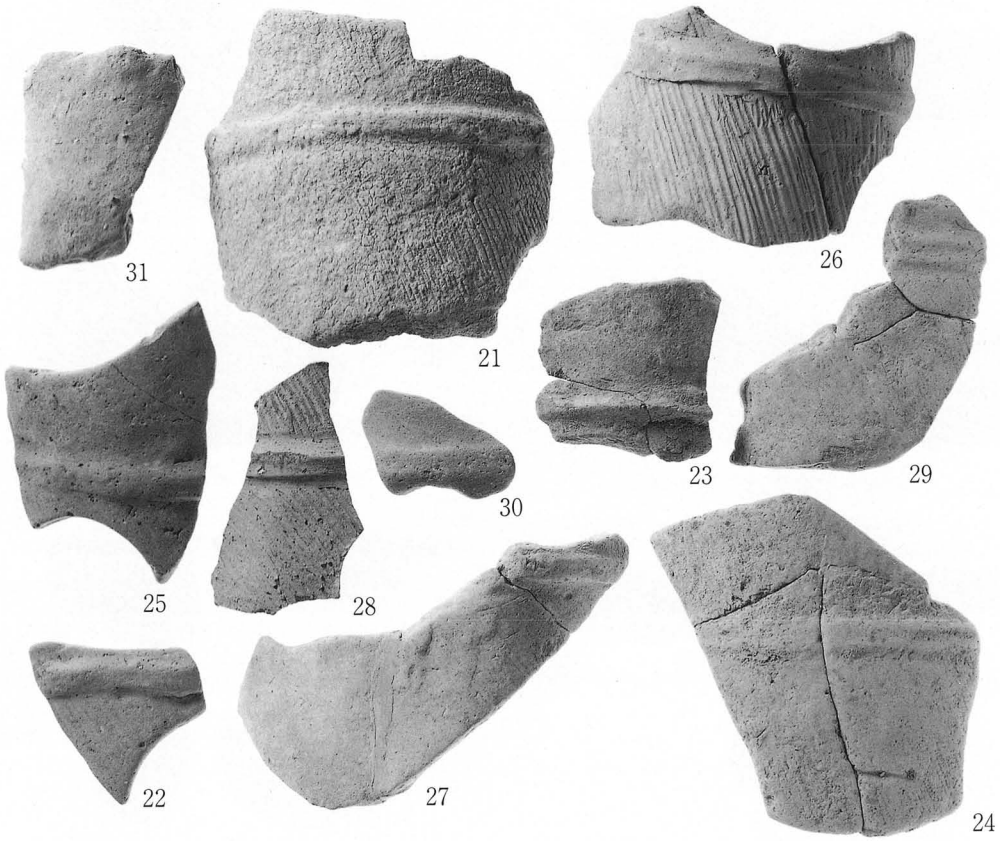
1．２号墳周濠（溝ＳＤ01）・溝ＳＤ02出土遺物

写真図版16

1．３号墳周濠（溝ＳＤ04）出土遺物

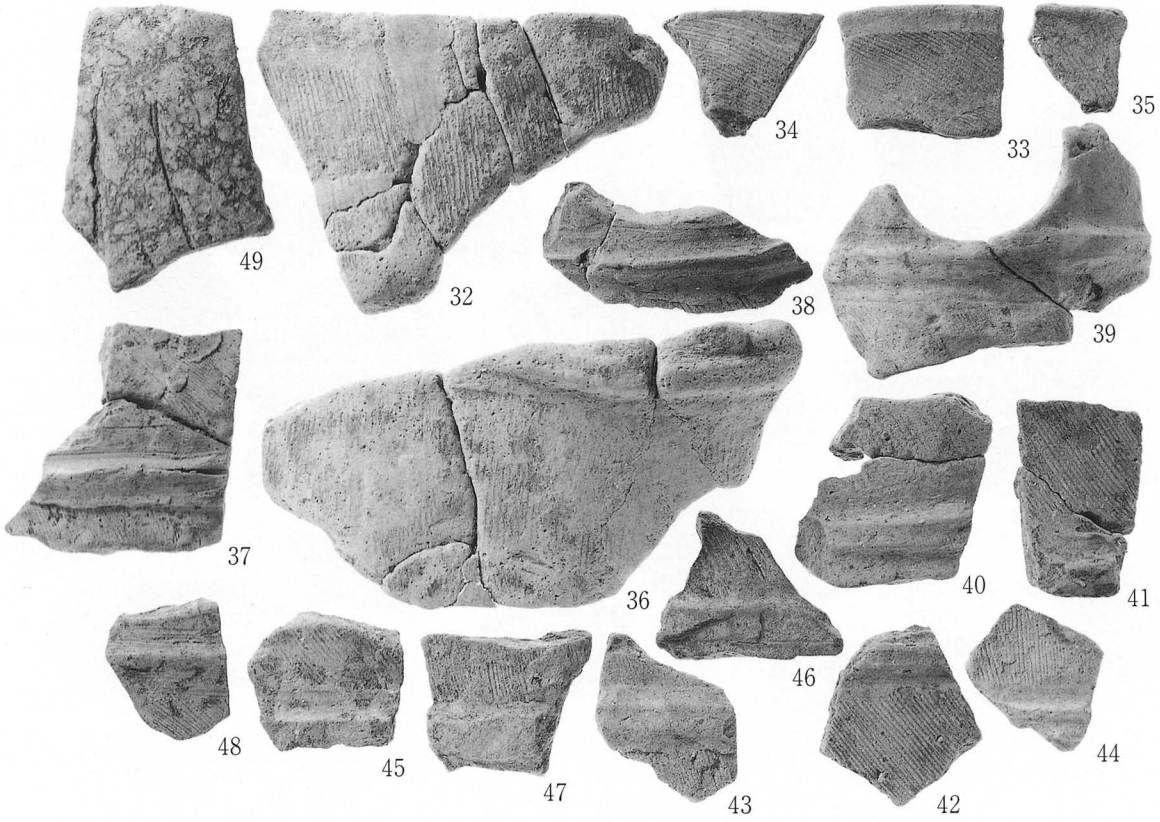
3．ピット出土遺物

2．落ち込みＳＸ04出土遺物

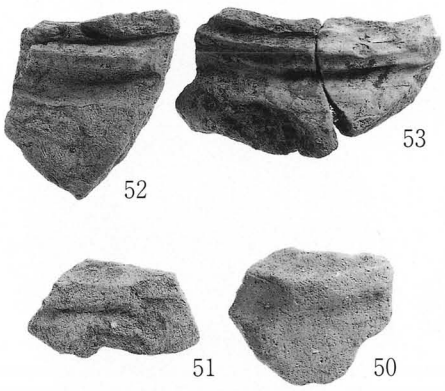


4．落ち込みＳＸ03出土遺物

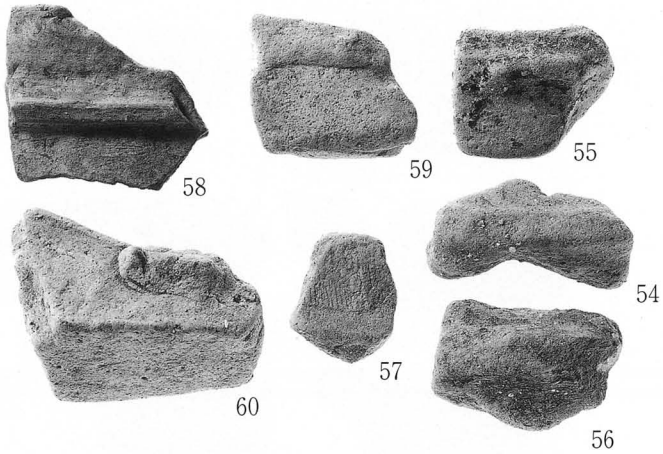
写真図版17



1．円筒埴輪

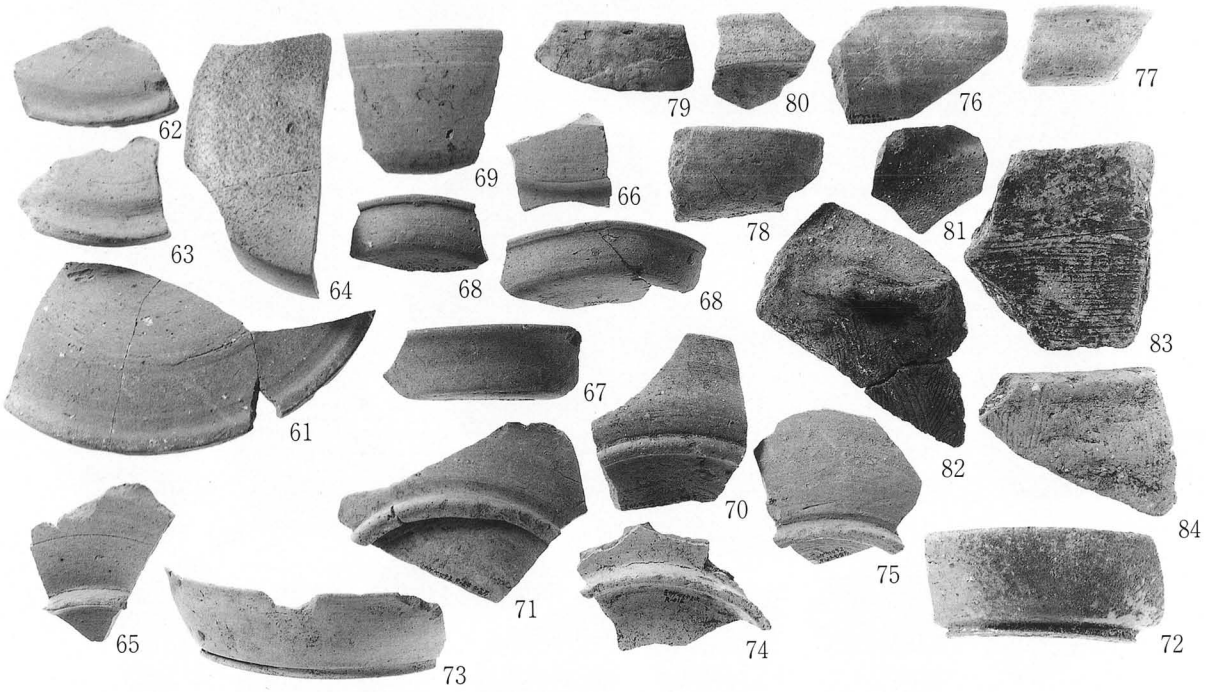


2．朝顔形円筒埴輪

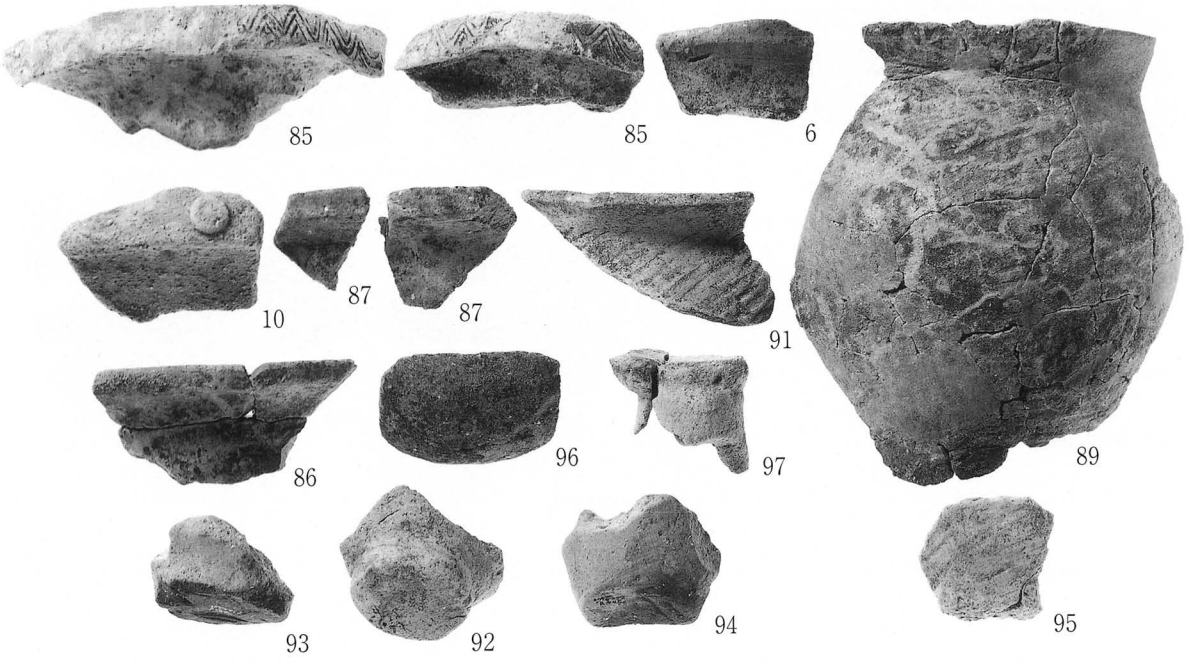


3．形象埴輪

写真図版18



1．奈良時代～平安時代の須恵器・土師器



2．弥生土器

報告書抄録

ふりがな	みかげやまていせきだい2じ　はっくつちょうさがいほう
書名	御影山手遺跡第2次　発掘調査概報
編著者名	関野　豊
編集機関	神戸市教育委員会
所在地	〒650-8570　兵庫県神戸市中央区加納町6丁目5番1号
発行年月日	西暦2006(平成18年)3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		緯度・経度		調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経			
御影山手遺跡	兵庫県神戸市東灘区御影山手2丁目12－22	28101	48	34°43′15～17″	135°14′57～59″	20050530～20050928	約1,200m²	民間の共同住宅

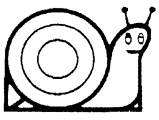
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
御影山手遺跡	集落跡・古墳	奈良時代	掘立柱建物	須恵器・土師器	掘立柱建物4棟
		古墳時代	古墳・周濠・土坑・落ち込み	須恵器・円筒埴輪・形象埴輪・滑石製紡錘車・鉄製鎌	1号墳は円墳、2・3号墳は方墳、1号墳のみ埴輪あり。
		弥生時代	ピット・土坑	弥生土器	

御影山手遺跡第2次 発掘調査概報
平成18年3月31日　印刷・発行

発行　神戸市教育委員会文化財課
〒650-8570　神戸市中央区加納町6丁目5番1号
TEL 078-322-6480

印刷　大和出版印刷株式会社
〒658-0031　神戸市東灘区向洋町東2丁目7番2号
TEL 078-857-2355

神戸市広報印刷物登録・平成17年度　第363号（A－6類）



本書は、再生紙を使用しています。